運命のともしび

高　峰

外国文出版社

運命のともしび

高　峰

外国文出版社

朝鮮・平壌

チュチェ 95（2006）

この本は、南朝鮮の自主哲学学会会員の高峰の著書『人間のこだま』第一分冊『運命のともしび』を訳出したものである。

編集部

目　　次

1　「アリアドネの糸」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

2　運命のともしびを求めて苦闘の数千年・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

3　「おのれ自らを知れ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

4　プロメテウスの神話と人間の自主性・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

5　なぜ働くかを知っている人間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

6　最初の石器製作者とロボット製作者の論争・・・・・・・・・・・・27

7　「人間の危機」の主唱者たち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

8　「シシュフォスの押し上げる岩」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

9　人間は「ロバ」にはなれない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

10　ロビンソン･クルーソーとオオカミ少女・・・・・・・・・・・・・・45

11　社会的集団と自我・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

12　人間が人間としての本分を全うするためには・・・・・・・・・53

13　世界の支配者・改造者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

14　世界の支配と改造発展の合法則性・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

15　愛と信頼の哲学的原理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

16　最高のレベルに達した人間の尊厳と価値・・・・・・・・・・・・・・69
17　爆破された原鉄炉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
18　人間万能と物質万能・兵器万能・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
19　「チョンリマ」の秘訣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
20　人間のこだまは天のこだま・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

はしがき

人間が人間らしく生きるためには、信念として頼るべき心のよるべがなければならない。

信念が固ければ、いかに険しい道も独力で乗り越えて進むことができ、そのような人間は山をも移せるのである。

20 世紀を送り、21 世紀を迎えた今は、過去のいつにもまして強い信念と意志が求められている。信念を守り通した人間は歴史の高い評価を受け、信念の放棄者は歴史の審判台に立たされるであろう。人類が希求する未来社会への信念、そのためにたたかう意志を喪失した人たちは、旧ソ連および東欧諸国で先代の偉大な闘争の獲得物＝社会主義を一朝にして崩壊させ、失業と貧困、不倫と放縦、犯罪と麻薬がはびこる社会を作り出してしまった。

人間は、科学的かつ革命的な哲学を持てば、正しい世界観に立脚し、確信をもって自己の運命を開いていけるのである。

近年、人びとの間で哲学への関心が高まっているが、それは、90 年代初めの東欧社会主義の崩壊を通して、マルクス・レーニン主義の限界性が明らかになり、それを克服する主体的思考の必要性が認識されはじめたからである。

ところで今、われわれにはそうした人びとの願望にこたえる哲学がある。それは、人間本位のチュチェ哲学＝「以民為天」の政治哲学である。

チュチェの哲学的世界観は、人間本位の社会をつくるうえで依

拠すべき世界観であり、運命開拓の道を照らすともしびである。

運命のともしびとは、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を開く力も自分自身にあるという真理を明らかにした、チュチェ思想の哲学的世界観をさしていう言葉である。

本書は、チュチェ哲学の原理を学問的に展開するよりも、通俗的な解説を旨として執筆された一種の入門書である。

内容に不備な点も少なくないであろうが、21 世紀に生きる現代人に心のよるべを提供するうえで、いくらかでも役立てば、それにこした喜びはない。

読者諸賢の鞭撻を願ってやまない。

筆　者

1　「アリアドネの糸」

地球上に道は無数にあるが、真理への道はただ一つという格言がある。

空飛ぶ飛行機や大洋を航行する汽船は、羅針盤を頼りにしてこそ、無事目的地に到着できる。

民族や人間も正しい世界観を持ってはじめて、尊厳ある生を生きることができるのであり、さもなければ、航路の定まらない船のようにあてどもなく漂流し、あげくのはては身の破滅を招くことにもなりかねないのである。幸いに目的地にたどりつけたとしても、それまでの道のりは筆舌に尽くせぬほど苦しいものであろう。

ギリシア神話の最高神ゼウスがある日、神々に向かって、地下に美しい宮殿を造営するよう命じた。オリュンポスの神々は、知恵を集め、精力を尽くして宮殿を完成した。ゼウスは、腹心の部下に地下宮殿の視察を命じた。ところが、かれはいつまでたっても戻ってこなかった。怒ったゼウスは他の部下を送ったが、これまたなしのつぶてである。ゼウスは自分の雷火が地下に及ばないと知って、かれらが裏切ったものと思った。そこで、今度は、クレタ王ミノスの娘アリアドネの恋人テセウスを地下宮殿に送った。

アリアドネは、最高神ゼウスの絶対的な権威にさからう神がいるとは思えない、そこにはきっと何か訳があるに違いないと思い、大きな糸巻きの糸の一端をテセウスの体にくくりつけた。テセウスは、宮殿の美しさに魅せられながら中を見て回った。ところが、い

ざ帰る段になると、通路が複雑を極め、どうしても出口への道がわからなかった。途方にくれていたかれは、ふと自分の体に巻かれた糸に気付いた。アリアドネがくくりつけてくれた糸である。かれは歓声を上げ、糸をたどって迷宮の外へ出ることができた。先に迷宮に入ったゼウスの部下は、出口が見つからずに餓死したのだった。

　この神話から、人びとは民族や人民、各個人の複雑きわまりない生の道のりのなかで、正しい真理への道を教える世界観を「アリアドネの糸」にたとえるようになった。

　正しい世界観を持てば、民族や人民、各個人の運命は真理の道に沿って開かれるものだが、そうでないと、迷路をさまよい、まかり間違えば滅亡を余儀なくされるのである。

　搾取階級を擁護する哲学は、民族や人民、各個人に正しい世界観を与えるのではなく、誤った世界観をもてあそび、空理空論をこととする。

　世間には、哲学などを学んでどうする、それなしにもこうしてちゃんと生きているではないか、哲学者はどう見ても俗世間の人間とは思えない、という人びともいる。そこで、このような人たちには、古代ギリシアの哲学者ソクラテスのエピソードを話して聞かせたい。

　ソクラテスは哲学者としての名声が高かったが、家族の養育には無関心であった。かれは妻の不平など一向に気にかけなかった。ある日、大道でおのれの哲学を講釈していたとき、それに聞き入る人がほとんどいないのを見て、あきれた妻がいきなり桶の水をぶっかけた。人びとはあっけにとられ、今に大騒動が持ち上がるだろうと、なりゆきを見守った。ところが、ソクラテスは顔色一つ変えず、

「この晴天に夕立ちとはな」と呟くだけだった。人びとは大笑いし、妻はとんだ赤恥をかいたという。

ところで、このエピソードには、「妻でさえ説得できないことを他人に説いたところでどうなる。家族が飢え死にするかも知れないのに、哲学におぼれているとはなんてばかげたことだ。哲学など古くさい昔話のようなもので、自分たちの生活にはなんの足しにもならないのだ。頭痛鉢巻きまでしてそんなものを研究する価値がどこにある」という皮肉がこもっている。

このような皮肉ないし批判は、哲学一般にたいするものではなく、旧来の哲学への批判、つまり、きびしい現実から顔をそむけた欧米式の哲学や、マルクス・レーニン主義に教条主義的に対応する哲学者への批判だと見るべきであろう。

旧来の哲学は、人びとに人間の運命開拓の道を教える、真の意味での哲学ではなかった。

ある哲学者は、「近代に導入された欧米的価値風土に根ざしていると思われる行動傾向のなかで、深い反省が求められるものがある。そのもっとも一般的で重要なものとして、①官能的快楽主義、②金利万能主義、③利己主義的行動をあげることができる」と述べている。これは、誤った哲学に災いされて、いびつな世界観を身につけた人たちの嘆かわしい生活態度を指摘したものである。

哲学が真に人間の運命の開拓に役立つものとなるためには、何よりも人間の運命の開拓を哲学の根本的使命とすべきである。

ところで、数千年の哲学史上、人間の運命の開拓を自らの使命とした哲学はなかった。

哲学の根本的使命が人間の運命の開拓にあるとしたのは、ほか

ならぬチュチェ思想である。チュチェ思想には、人間の運命開拓の原理とその方法論が明示されている。

朝鮮労働党金正日(キムジョンイル)総書記はつぎのように述べている。

「チュチェ思想は人間の本質的特徴と世界における人間の地位と役割を新たに解明して、人間中心の世界観を確立しました」(『チュチェ思想について』日本語版 12 ページ)

人間は世界のなかで生きており、その運命は世界とのかかわりのなかで開かれている。即ち、人間は自然を自己の要求に合わせて改造し、そのなかで生活条件を整えつつ生活手段を獲得していく。また人間は、社会を改造して自主的権利を拡大し、ひいては、自分自身をも不断に改造しながら、自主的要求と創造的能力、それに世界と自己の運命の主人としての地位を高めて、主人としての責務と役割をよりよく全うしていくのである。

チュチェ哲学は、世界のなかで人間が占める地位と役割の問題を哲学の根本的問題としてうち出し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理＝運命開拓の原理を明らかにした。

これは、人間のための哲学的原理、言いかえれば、人間の運命開拓の道と方法を科学的に解明する哲学的原理の発見であった。この発見によって、世界観はその発展史上根本的な転換を起こし、ここに、人間の運命開拓の正しい羅針盤としての、科学的かつ革命的な世界観の新紀元が開かれたのである。

チュチェ哲学は歴史上はじめて、人間の本質的属性が自主性と創造性、意識性であることを明らかにし、自主性と創造性、意識性を持つ社会的存在としての人間によって世界が支配され、改造され

るという、世界にたいする新たな見解を示した。
　ここから、人間は世界の主人・支配者であり、世界でもっとも有力な改造者であるため、世界のあらゆるものを人間の自主的な要求と利益をみたす対象として人間に奉仕させるべきであり、また、何事であれ、すべての問題を人間の役割を高めながら解決していくべきであるとする、哲学的方法論が提起されるのである。
　今日、世界の多くの民族と人民は、チュチェ哲学が明らかにした運命開拓の原理を最高の原理・原則とし、その方法論にもとづいて人間的な社会を作るためのたたかいに積極的に立ち上がっている。

2　運命のともしびを求めて苦闘の数千年

　真理は悟ってみると、簡単明瞭で、平凡なものだ、とはよく言われる言葉である。
　自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を開く力も自分自身にあるというチュチュ思想的世界観の哲学的原理も、その内容が実に簡単明瞭で、しかももっとも平凡かつ普遍的な真理である。
　哲学的原理や真理は凡人に理解できるものではないと思っていた人が、自己の運命の主人は自分自身であるという、その平凡な指摘が自分の運命開拓の原理であると知ったら、どんなに驚き、感激することであろうか。
　目に見えない存在とその力によって支配され、運命が定まるのが人間であるとする宿命論にとりつかれて、ときには神秘な存在に、またあるときには英雄豪傑の力にわが運命を託して、踏んだり蹴っ

たりされながら暗黒の世界を生きてきた人びとが、目の前がぱっと開けたようだと歓声をあげるのも無理はない。

しかし、このように簡単明瞭に運命開拓の原理が解明され、人類に運命のともしびがもたらされるまでには、実に数千年の歴史が流れたのである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「従来の哲学的世界観では、世界が物質でなりたっているという唯物論の原理と、世界がたえず変化発展するという弁証法の原理が解明されています。こうした哲学的原理のみでは、物質世界の一般的特徴は解明できても、世界における人間の地位と役割は解明できません」(『チュチェ思想教育における若干の問題について』日本語版5ページ)

人間の哲学的思索でまず焦点となったのは、世界が人間にとってどのような存在であるかという問題であった。

最初に人びとの精神世界を支配したのは、天帝や太陽神のような神秘な超人間的存在によって人間と世界が創造され、人間はその前に無力で、与えられた運命にすなおに従わなければならないという観念論であった。宗教的神秘主義を説くこのような観念論は、人間に運命開拓の信念と意志を放棄させ、すべてを宿命として諦めさせて、神の名で神聖化された搾取制度に順応するようにする思想的毒素であった。反動的搾取階級は、かれらの首長を天子に押し立て、神の子である王の命に従わなければ天罰が下ると説教した。権力も財力もない無知な人民大衆は、世界と人間の運命を決定するという神に幸せを祈り、ありもしない罪を作って贖罪し、世々代々祈りを捧げてきたが、かれらの境遇は一向に変わらなかった。信仰心の厚

かったある信者が、いまわの際に、わが子らの手を取って、「この世には金持ちのための神さまはいても、わしらのような貧乏人のための神さまはいないようだ。先祖代々ひたすら祈り続けてきたが、貧乏人に恵みを垂れてくれるようなことは、ただの一度だってなかった」と嘆息したという。

『西遊記』の孫悟空のように、地獄へ降りていって、死人の名簿から自分の名前を消したり、60 年の寿命を 600 年に書き変えたりするような器量があれば、話はまた別であるが……。

原始社会の人たちはまた、かれらに生活環境や食べ物を提供する自然に畏敬の念を抱き、動植物にも人間と同じような霊魂が宿っているとするトーテミズムや、ひいては世界の万物に精霊があると信ずるアニミズムを生んだ。

階級の分化によって国家が形成されると、搾取階級は神殿を作って神を祭り、かれらの国家と制度、階級を神の摂理によるものだと説教し、庇護した。ギリシアの都市国家は、神殿を中心に形成された。例えば、デルフォイはアポロン神殿を、エフェソスはアルテミス神殿を、キプロスはアフロディテ神殿を、アテネはゼウスを祭るオリュンポス神殿を中心にして形成された。

こうした世界における今一つの思想的潮流は、世界は自我の所産であり、歴史と人間の運命は超人の意志によって決定されるという世界観である。このような主観的観念論が人類にいかに大きな弊害をもたらしたかは、ナポレオンやヒトラー、日本の天皇のような存在を思い起こすだけで十分であろう。

観念論的世界観とは反対に、唯物論的世界観は主として世界の始原を具体的な根源物質に求め、それが水や火、空気、土などであ

るとし、のちには、すべての物質が原子からなっているとする見解に達した。唯物論は世界の始原問題からしだいに世界の本質問題へと論点を移し、世界の本質が人間の意識から独立した客観的実在にあるとする現代唯物論へと発展したのであった。

物質と意識の関係問題は、マルクス主義哲学によって一応科学的に解明され、久しい論争にピリオドが打たれた。

マルクス主義以前にも、世界の物質性を主張した唯物論哲学があったが、それらは自然現象については唯物論的な説明を加えながらも、社会現象では観念論に陥っていた。しかし、マルクス主義唯物史観の確立によって、観念論は致命的な打撃を受け、唯物論が決定的な勝利をおさめたのである。

マルクス・レーニン主義は、社会が何か神秘な要因や超人の意思によって発展するのではなく、物質的富の生産様式を基本とする社会の物質的生活条件が社会の基礎をなし、生産様式の発展に従って、社会が合法則的に変化するということを明らかにした。これは、世界観の発展史上エポックメーキングな、偉大な哲学的発見であった。唯物史観の確立によって、社会を最後の隠れ家としていた観念論は決定的な打撃を受けた。マルクスが発見した唯物史観の意義はこのように大きかったが、それはあくまでも当時の歴史的条件を踏まえた評価であった。

唯物史観の出現後も観念論は死滅せず、帝国主義時代に入ると新たな装いをこらして盛行しはじめた。それらは、人間の本性をゆがめた主観的観念論や人間哲学を標榜する観念論である。

このことは、われわれに一つの重要な問題を投げかけている。それは、人間の運命を正しく開拓するためには世界の本質の解明に

とどまらず、人間の本質を科学的に解明し、それを踏まえて、運命開拓の問題にアプローチしなければならないということである。言いかえれば、人間の本質を科学的に解明しないでは、観念論を決定的に打破できないということである。

帝国主義時代の観念論哲学は、マルクス主義への攻撃の矛先を、マルクス主義の盲点と言える人間の本性論に向けた。実存主義や実用主義、フロイト主義、人格主義などの現代ブルジョア哲学は、人間の本性をねじ曲げ、植民地略奪戦争、人種差別、殺人、強姦、淫蕩、厭世、自堕落、セックス、黄金万能、個人主義、利己主義の合理化に努めている。人間の本性については、数千年の長きにわたってさまざまに論じられてきたが、科学的な解明を見るまでに至らなかった。人間の本性が正しく解明されないでは、人間の運命開拓の科学的原理は見出せないのである。

人間を社会的関係のなかで見たマルクス主義は、人間についての観念論的解釈を全面的に否定することにとどまった。それは、マルクス主義が人間の本性を解明するまでに至っていなかったからである。人間の本性が科学的に解明されてこそ、世界における人間の地位と役割を踏まえて、その運命開拓の原理を明らかにすることができるのである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「チュチェ思想によって、人間は自主性、創造性、意識性をもった社会的存在であることが解明された結果、人間にたいする完璧な哲学的解明がなされるようになりました」（『チュチェ思想について』日本語版 75 ページ）

チュチェ思想はこのように、人間が自主性と創造性、意識性を

持つ社会的存在であることを明らかにして、人間の本性を科学的に解明したのであった。つまり、人間が自主性と創造性、意識性を持つ社会的存在であるため、世界に宿命的にではなく革命的に、受動的にではなく能動的に対応し、盲目的にではなく目的意識的にそれを改造していくのであり、また、自主性と創造性、意識性を持つ社会的存在であるため、世界でもっともすぐれた有力な存在となり、世界にたいする唯一の支配者・改造者になるのである。

　このように、チュチェ思想によって歴史上はじめて、世界における人間の地位と役割を科学的に解明した哲学的原理、即ち、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理と、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を開く力も自分自身にあるという原理が明らかにされたのであった。

　人間に、運命開拓の原理＝運命のともしびがもたらされるまでには、実に数千年の歴史が流れた。この長い歴史の流れのなかで、自主性を求めて立ち上がっては無残に鎮圧された人民大衆のたたかいは数知れず、民族や人民大衆の自主性を蹂躙する戦争で傷つき、倒れた民族や人民はまたどれほどであったろうか。

　しかし、運命のともしびを求めてさまよった数千年にわたる苦難の歴史はついに、終わりを告げることになった。

3　「おのれ自らを知れ」

　古代ギリシアの新喜劇作者メナンドロスは、「人間が人間らしいとき、それはなんと美しいことだろうか」と言った。この意味はさ

まざまに解釈されようが、哲学的には、「人間は人間らしくなければならない」、つまり、人間は人間の本性を違えずに生きるべきだと解釈してよいのではなかろうか。

人間が人間らしく生きるうえで、まず問題となるのは、人間とはいかなる存在かということである。

ソクラテスは、人間の道徳的本性と倫理的価値の問題を哲学の中心問題としてとらえ、デルフォイのアポロン神殿に掲げられた格言「おのれ自らを知れ」に留意せよと訴えた。

この格言をめぐって、古今東西の哲学者や神学者、文芸家が精力を傾けて思索し、論争し、探究したが、誰一人、人間の本性を解明することができなかった。それでルソーは、「およそ人間の知識のなかでもっとも有用でありながらも、もっとも進んでいないのが人間についての知識ではなかろうか」と嘆いたのである。

古くから、敵を知ることを「智」、おのれを知ることを「明」として、敵を知りおのれを知る者は百戦百勝し、敵を知らずおのれを知る者は一勝一敗し、敵もおのれも知らない者は百戦百敗するとされてきた。

総じて、人間が人間らしく生きられなかったのは、人間がおのれ自身を知らなかったことに起因していたと言ってよいであろう。

人間がいかなる存在であるかという哲学上の久しい疑問は、チュチェ思想によってはじめて解明された。

日本の一政治家が、「人間は百万年の歴史を持っているが、自分自身を知らずに今日に至った。20 世紀の朝鮮が生んだ天才中の天才である金日成（キム イル ソン）主席閣下と人類の未来の代表者である金正日閣下の英知のおかげで、われわれは初めて自分の本性を知ることができ

た。全人類は洋の東西を問わず、人間を解明したその方たちに当然あつい感謝を捧げるべきである」と述べたのは、十分にうなずけることである。

人間は人間の本性を違えずに生きてこそ、人間らしく生きる人間だと言える。人間の本性を違えずに生きること——ここに、われわれはいっさいの美と価値、幸福と理想、正義の尺度を求めるべきではなかろうか。

人間は天使でもなければ、動物でもない。したがって死後の安楽を願って、宗教の戒律のもとで苦行したり、諦めに心の慰めを求めたりする宿命的な生き方や、太く短く瞬時の快楽にうつつを抜かす刹那主義的な生き方は、真の人間の生き方ではない。また、他人を搾取して生きたり、他人に虐げられ、抑えつけられながらも、黙々としてその運命に甘んじたりする奴隷のような生き方も、人間的な生き方ではない。

人間が人間の本性と裏腹な生き方をする場合、「奴隷的な生活」「けもののような生活」「寄生虫のような生活」などといった悲惨な事態が、そこに現出するのである。

数千年の長きにわたって、宿命論の泥沼のなかで、ありとあらゆるさげすみと虐待、苦痛に甘んじながら生涯を送った人間の悲劇、情欲のおもむくままに淫蕩にふけり、そこに人生の快楽を求める人間の悲劇、財物に目がくらんで殺人強盗をこととし、あるいは権力の座について人民を苦しめる人面獣心の徒輩によって演じられる人間の悲劇——これらすべては、おのれを知らずに生きてきた人間の、歴史的な悲劇であったと言える。

人間は長年、神秘な宿命論にとらわれてきた。

キリスト教は、天帝ヤーウェが粘土で最初の人間アダムを創造し、つぎにアダムが眠っている間にかれの肋骨からエバを創造したとし、それを信じこませるために、ローマ教皇グレゴリウス 8 世は、紀元前 5199 年に人間が創造されたとし、イギリスのある神学者は、それが紀元前 4004 年 10 月 23 日午前 10 時のことだったと、その正確な時刻まで示した。

インドのヴェーダ神話では、死者の王ヤマと双生児の妹ヤミーが、ともに男と女の性を持ち、分身能力を備えていたので、かれらが人間を生んだとしている。

人間の起原がどのように説明されようとも、そのような神秘説は人間が神によって創造され、その意思によって生きる無力な存在、自己の運命を神にゆだねて暮らす宿命的な存在だということを説教している。

人間の生活に大きな影響を及ぼした今一つの人間観は、生物学的ないしエロス的人間観である。その内容はさまざまでまとまりがないが、そこに共通しているのは、本質において人間が本能に支配されて生きる存在だということである。プラグマティストのジョン・デューイは、「人間とは、生活環境に適応することによって生命を保つ、本能的な生物学的存在」だと言っている。プラグマティズムは、人間が「所有本能」や「闘争本能」「自己隠蔽本能」からくる「選択的嗜好」をもって行動するものであるとしながら、侵略や略奪も人間の本能に根ざすものとして合理化し、「アメリカ式ライフスタイル」に哲学的根拠を与えた。

深層心理学の創始者フロイトは、人間には固有な性本能があり、人間のあらゆる行動はこの性本能によって支配されるとした。かれ

は、それとは知らずに父を殺して母と結婚したギリシア神話のオイディプスにちなんで、人間の無意識的な性本能をエディプス・コンプレックスと名づけ、これが人間のすべての行動の原因であるとしている。フロイト主義は社会悪のすべての原因を性本能の障害に求めて、性の解放こそ社会悪を一掃する万能薬だと説いた。フロイトは性の解放を叫んでヨーロッパ各地を転々としながら遊蕩三昧に生きた。1920 年代ヨーロッパの有閑マダムの間では、フロイトに夢中になり、一度かれに抱かれてみたいと願う風潮が生まれさえした。

現代の世界において、人間の生活にもっとも醜悪な影響を及ぼした人間観の一つに、実存主義的な人間観がある。実存主義は、人間をあらゆる社会的関係と無縁な孤立した単独者であるとして、現代を人間危機の時代であると特徴づけた。

実存主義者は、「後ろには絶壁があり、前には暗黒がある。暗黒のなかには深淵が横たわっている。それに、今立っている場所さえ崩れようとしている」と説いている。このような状況に置かれた人間にはつねに深刻な不安がつきまとう。かれらにとって最大の関心は死の恐怖であり、そこから生まれるのは悲哀と厭世、堕落よりほかに何もない。ある実存主義者は、「われわれは死の宣告を受け、自分の番を待ちながら生きている罪人だ」と絶叫した。かれらは、「一寸先は闇だから、今の刹那を楽しめ」「社会や孫子のために建設したり、備蓄したりすることはない。食べ放題、飲み放題に暮らせばいいのだ。どうせあすは死ぬ身じゃないか」という刹那主義こそ人間の本性にかなうものだと主張して、人びとに最大限の快楽を求めるよう説教している。その一方では、「君もぼくもいずれ死ぬほかないのに、何をあくせくし、誰に反対してたたかう必要がある

のか」「恐ろしい現実から逃れる唯一の道は、現実とたたかうことではなく、自殺することだ」と説く。人間の健全な自主精神を麻痺させ、人びとを自主と民主をめざすたたかいから引き離して、「死」のみに心をとらわれる無力な人間に変えようとするところに、実存主義の狙いがある。それならば、隣人を思い、隣人に尽くすことを無益なものとけなす哀れな実存主義者こそ、他に先んじて自殺し、単独者の苦痛から解放されるべきではなかろうか。そうしたら、諸君の死を「実存主義賛歌」としてたたえ、拍手を送ろう。笑止千万と言うほかない。

また、人間の本性がエゴにあるとして、人間のすべての活動の根源をそこに求める拝金主義哲学もある。これは、資本主義社会の黄金万能主義と弱肉強食思想を合理化する反動的な人間観である。

もちろん、哲学思想史上には、人間の本性を肯定的に解明しようとした思想も少なくない。「人間は理性を持つ動物」「人間は思考する存在」「人間は言語を持つ存在」「人間は労働する存在」などという見解がそれである。思考や言語、労働、理性などは確かにみな、人間だけが持つ特性である。ところで、この労働や思考、言語、理性などが、どうして人間にだけ備わっているのかということについては、何一つ解明されていなかった。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「人間にかんする問題は、従来の哲学でもしばしば論議の対象とされてきたが、そのほとんどは社会的関係を離れた純然たる人間にたいする抽象的な見解に止まっていました」（『チュチェ思想について』日本語版 74 ページ）

従来、人間の本性論が科学的な完成を見るに至らなかったのは、

社会的関係から離れて人間を抽象的に考察したところに、その原因があったと言える。

人間の本質にかんする問題は、マルクス主義哲学によってはじめて、社会的関係のなかで考察された。しかし、マルクス主義哲学においては、人間が社会における物質的存在であると強調するにとどまり、自然的存在と区別される社会的存在とはどのようなものであり、また、なぜ人間が労働し、社会的関係を結んで生きるのかという問題については、根源的な解釈を与えなかった。

チュチェ哲学によって、人間は自主性と創造性、意識性を本質的属性とする社会的存在であるということが明らかにされ、ここに長い哲学史上はじめて、人間の本性にかんする完璧な科学的解明がなされ、自分自身を知らずに生きてきた人間の悲劇の歴史が幕をおろしたのである。

チュチェ哲学の出現によって、人間が自分自身を知って人間らしく生きる、人間の真の歴史がはじまったと言える。

4　プロメテウスの神話と人間の自主性

1930 年代、朝鮮ではつぎのような歌がうたわれていた。

人間は人間の名のもと
自由の権利を持って生まれた
自由の権利なくしては生きても死人
命は捨てても自由は捨てられぬ

歌詞には深い意味がこもっている。つまり、人間には誰であれ、何物にも束縛されず、自由に生きようとする本性が備わっているということである。

何かに束縛されて屈辱的に生きることをよしとする人間は、どこにもいないであろう。

世界と自己の運命の主人として自由に生きようとする性質＝自主性は、人間の本性である。自主性こそは、世界に従属して生きる動物とは異なる社会的人間の本質的な属性である。したがって、自由を奪われ、他人に従属して屈従的に生きることは、社会的人間の本性を喪失し、動物的に生きることを意味する。だから、社会的人間としての自覚を持つ人びとは、生命をも惜しみなくなげうって自主性を守るのである。

昔から、他人への従属に反対して自由に生きようという願いを生命より大事にし、守り、たたかった人物は英雄とされ、真の人間として崇敬されてきた。

自主性は人間の本性であり、自主性を重んずるのは人間に共通の志向である。だから、良識ある知識人は、ギリシア神話のプロメテウスに好感を抱くのであろう。プロメテウスは、天界の火を盗んで人間に与えたかどで、ゼウスの怒りを買い、カフカスの絶壁に縛られた。そのうえ、毎日ワシがかれの生き肝をついばみ、食われた肝は夜のうちにまた元通りになるという、いつ止むとも知れない刑罰を加えられた。ゼウスから罪を認めるなら許してやろうと言われたとき、プロメテウスは、「わしはすべての神を呪う」「わしはこの悲しみをゼウスの下人になる屈辱と換えるようなことはしない」と言って、不正に組する神々をののしった。プロメテウスの神話は、

人類があらゆる従属と束縛から解放され、自由に生きることを生命よりも大切にしてきたことを語っている。

ところが、過去のどの哲学者や哲学思想も、人間の自主的本性を正しく解明することができなかった。

人間の自主的本性は、金日成主席によってはじめて科学的に解明され、金正日総書記によって理論的によりいっそう体系化されたのである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「人間は自主性をもつ存在、自主的な社会的存在であります」

人間は自主性を本質的な属性とし、自主的に生き、活動する社会的存在である。

では、自主性が人間の本質的属性であるとする根拠はなんであろうか。

第 1 の根拠は、自主性が社会的存在である人間だけが持つ性質だということにある。

人間以外の生命は、生物学的ないし本能的欲求のもとに、環境に順応して生きるだけである。

動物は環境に順応して、その構造・形態を変えながら生きていく。環境に順応して生きようとする動物の本能的欲求は、生物学的個体としての欲求であり、その行動も生物学的個体の欲求にもとづいてなされる。

もちろん人間も肉体を持ち、環境の影響を受けるが、人間は環境に順応するよりも、自然の束縛に甘んずることなく、それを改造し、支配する活動を通して生き、発展するのである。人間を純粋に生物学的個体と見る観点に立てば、そのような人間は、あらゆる従

属と束縛から脱して、世界と自己の運命の主人として生きようとする自主的な要求を持てなくなる。ただ、社会的集団の一構成員としての自分を自覚した人間だけが、自主的な要求を持てるのである。

社会的･政治的集団と自分を結びつけ、集団の一構成員としての自分を自覚している人だけが、民族および人民の自主的な要求を自分の要求とし、民族と人民の力に頼って、自主と民主をかちとるたたかいに立ち上がれるのである。

自分を社会的集団とは無縁の純粋な個体とみなす人間は、屈従的な生活に甘んじて、自主性をめざす民族と人民のたたかいには関心すら寄せないのである。

第 2 の根拠は、それが個別的な属性ではなく、人間のあらゆる行動に一貫して現れる根本的な性質であるということにある。

自主性は人間のすべての活動の源泉であり、要因である。人間のすべての活動はつまるところ、あらゆる従属と束縛から脱して自由に生きようとする自主的な要求を踏まえて、一定の目的を定め、心身を労してそれを追求する行為だと言える。人間だけがなしうる労働や革命運動は、本能的にではなく、自主的な要求を踏まえておこなう行為であり、また世界に順応することなく、それを改造し、支配するための行為であり、ひいては自力で自然と社会を改造し、変革して自分に従わせていく行為である。

第 3 の根拠は、それが社会的人間の生命をなす属性だということにある。

人間は自主性を喪失すれば、生命があっても社会的には死人と変わらなくなる。社会的に生存権のような基本的人権すら奪われ、従属と束縛に甘んじる人間は、たんにものを食べては排泄し、種を

増やすだけの動物の生活となんら変わるところがない。

社会的従属と束縛から脱して自主性を確立しようとする人間の活動は、一定の社会的･政治的集団を通してのみ実現でき、人間は社会的･政治的集団の構成員となってはじめて、自主性を持って人間らしく生きるための活動を進めることができるのである。社会的･政治的集団の構成員としての生命が社会的･政治的生命であり、したがって、人間は社会的･政治的生命を持つとき、自主性の備わった社会的存在になれるのである。

では、人間の本質的属性である自主性は、生活のなかでどのように現れるのであろうか。

自主性は、自然との関係では、自然の束縛を克服し、自然を支配して生きる性質として表現される。それは、自然の法則に盲目的に順応するのではなく、それを認識し、利用して自然を人間に役立たせるように改造する活動として、また、骨の折れる労働から人間を解放し、楽に、しかも能率的に働いていけるようにする活動として現れる。

自主性は、社会との関係では、社会的従属に反対し、社会的関係を改造し、支配する性質として表現される。

それは何よりも、民族的従属と抑圧、階級的搾取と抑圧を一掃して民族および階級の自主性を実現するたたかいのなかで現れる。

日本帝国主義侵略者の初代朝鮮総督寺内正毅は着任早々、「朝鮮人は日本の法規に服従するか、死か、そのいずれかを選ばねばならぬ」と公言した。しかし、朝鮮民族は反日民族解放闘争をくりひろげ、ついに日本帝国主義を駆逐して祖国を解放した。これは、民族の自主性をめざすたたかいでおさめた朝鮮民族の偉大な勝利であっ

た。しかしながら、1945 年 8 月 15 日の解放後、日本に代わって米軍が南朝鮮を占領し、植民地統治を実施した。1980 年 8 月 8 日、南朝鮮駐屯米軍司令官ウィッカムは、「韓国民の国民性とは野ネズミのようなもので、誰が指導者になっても、それに黙々と従うであろう。韓国民には民主主義がふさわしくない」と放言した。南朝鮮人民はこれに、反米自主化闘争をもってこたえた。ウィッカムは、朝鮮人民の民族性を見誤った。8･15 解放後、1946 年の 10 月人民抗争、1948 年の 2･7 救国闘争と 5･10 南朝鮮単独選挙反対闘争、1960 年の 4･19 人民蜂起、1980 年の光州人民蜂起など南朝鮮人民のたたかいは、親日・親米売国走狗李承晩（リスンマン）、朴正煕（パクチョンヒ）、全斗煥（チョンドゥホワン）、盧泰愚（ロテウ）などを追放するたたかいであり、アメリカ帝国主義の植民地支配を全面的に否定する民族自主のたたかいであった。

社会的自主性はまた、社会発展の合法則性を認識し、社会生活を主動的、計画的に営むことで表現される。それはまた、進歩的な思想と健全な文化をもって、自ら判断し、決心し、活動する人間の性質として表現される。

自主性は不断に発展する社会的人間の性質である。自主的に生きようとする人間の要求はたえず増大し、一つの要求がかなうと、その実現過程でさらに伸びた力や能力を踏まえて、人間は新たなより高い要求をうち出し、それをひきつづき実現していく。

自主性を持つことによって、人間は世界と自己の運命の主人としての地位を占めるようになったのである。

5　なぜ働くかを知っている人間

ここで一つの問題を提起したい。それは、「人間はなぜ働くのか？」ということである。

あまりにも自明な、たやすい問題だとも考えられようが、実はそうではない。

まず、「食べるために働く」という解答が考えられる。

この解答は、資本主義社会で長時間労働を強いられながらも、なぜ資本家に労働力を売るのかという質問への解答にはなりえても、人間はなぜ働くのかという問題の原理的な解答にはならない。

搾取社会には、労働をさげすみ、働かなくても飽食暖衣する搾取者や特権層がいる。

労働力を商品として売らなければ、たちまち飢餓に襲われ、また、労働の産物が生産者の福利ならぬ生産者大衆支配の手段として利用されるのが、搾取社会の体質である。

元来、労働は人間に便利な生活条件と豊かな生活手段を提供する尊くも誇らしい人間固有の活動である。ところが、このような労働の本質がねじ曲げられていやしまれ、しかもその生産物が生産者大衆を支配し、搾取する手段として悪用される社会は、ゆがんだ社会、本末が転例した社会といわざるをえない。

労働は人間の自主性を実現するために進める社会的人間の本性的な活動である。ところが、搾取社会では、労働蔑視思想によって労働生活が非人間的な性格を帯び、真の意味での労働生活やその目的と使命は覆い隠されている。

しかし、労働の本質と使命についての正しい認識をいだくことができれば、人びとは人間の自主性を蹂躙する労働生活が、どうして人びとに強要されるようになったかということを理解し、尊くも誇らしい、本来の意味での労働生活、つまり自主的な労働生活を取り戻すためのたたかいに立ち上がれるようになるのである。

搾取者は、「肉体労働をする労働者は、精神労働をする資本家より劣る。労働者は筋肉労働に適した体質を持つため、体つきも醜いが、資本家の子女は姿かたちが整って美しい。そもそも労働者と資本家は生まれからして違う。資本家はそのすぐれた資質によって支配者の地位についているのだ。しかし、劣等な労働者は生来貧賤に甘んじてしかるべきだ」と放言してはばからない。

これにたいして、労働者側はこう反論する。

「労働者こそ、もっとも健全な美しい精神の持ち主だ。労働者は他人の何物をも奪わない。かれらはお互い力を合わせ、いたわりあいながら、社会のあらゆる富を作り出している。労働者の体格こそ労働によって鍛えられた、たくましくも均整のとれた人間らしい体格なのだ。労働によって鍛えられていない資本家の体は均整に欠けて、しまりがなく、その目はずるがしこく光り、顔色は青白い。脂肪太りを気に病んで、ダイエットに努めるが効果がない。生産労働をさげすみながらも、利潤の追求には目の色を変えているから、精神的な堕落が避けられない。栄耀栄華を追ってうわべをてらい、利己心が人一倍強くて貪欲にみちている。資本家に善良な美しい魂を求めるのは、豚小屋で真珠を探すようなものだ」

人間の真の労働生活と美しい健全な精神生活を取り戻し、人間の自主性を守るため、黄金万能主義に毒された社会の労働蔑視思想、

自主性のかけらさえない労働生活は払拭されるべきであり、そのためには、逆さまになった社会を立て直さなければならない。

「人間はなぜ働くのか」という問いにたいする今一つの解答がある。それは、「労働は人間の本性であるからだ」というものである。

今日、われわれの周辺には、マルクス主義を生かじりして、社会の不条理な現実を真剣に究明しようとしない教条主義者が少なくない。かれらは人間の本性を正しく理解しようとはしないで、教条主義的に、労働こそ社会的人間の本性だとしながら、労働は社会活動の第一歩であり、労働が人間を作ったとして、その根拠なるものを示している。

エンゲルスは、その著書『猿から人間への進化における労働の役割』で、労働は人間の社会的活動の第一歩であり、労働の過程で思惟と言語が生まれ、ある意味では、労働が人間自体を創造したと言える、と述べている。

もちろん、労働と思惟、言語が人間を動物と区別する特性であることは間違いない。しかし、労働は社会的人間がおこなう活動、言いかえれば、人間の本性の発現であって、本性そのものではない。

では、労働の本質および目的と使命はなんであろうか。

マルクス主義は、人間の物質的な社会的活動である労働生活がすべての社会的関係の基礎にあることを明らかにして、社会現象にたいするいっさいの神秘主義的な見解を打破し、唯物史観を定立した。しかし、マルクス主義は、人間がなぜ働くのか、労働の目的と使命は何かということについては、人間を主体にして解明するまでにいたらなかった。

労働はその本質において、自然への従属を振り切るための人間

の自主的な活動であり、その目的と使命は人間の自主性を実現することにある。

労働は人間の自主的な本性と要求に根ざす社会的活動であり、労働の目的と使命は、人間が自主的に生きるために必要な条件と手段を作り出して、自己の自主性をよりよく実現し、それによって、自然の改造者･支配者としての地位を占め、役割を果たすことにある。

したがって、労働は社会的人間が自己の本性を実現するための生活にとって不可欠の、第一義的な要求であり、誇らしくも神聖なものである。言いかえれば、労働は、人間が世界と自己の運命の主人としての地位を占め、主人としての役割を果たすための活動であり、人間らしく生きるための真正な人間の活動である。

労働の本質および目的と使命にたいするこのような観点に立ってこそ、逆立ちしている社会の不条理を正しく分析し、人間が人間らしく生きる社会を作るための活動の指針を得ることができるのである。

労働を通して、人間は幸福で豊かな生活の条件を作り出していく。労働が誇らしくも神聖なものとされ、また、それが義務である以上に、生活の第一の要求とされる社会こそ、真正な人間のめざす社会である。

6　最初の石器製作者とロボット製作者の論争

「機械が仕事をする」とはよく言われる言葉であるが、それでは、人間が仕事をするのか、それとも機械が仕事をするのかを論じ

て見ることにしよう。

　この問題は、最初の石器製作者とロボット製作者のつぎのような論争にたとえられるのではなかろうか。

　最初の石器製作者はこう主張する。「人間は自然を自己の要求に合わせて改造していくなかで、労働上の必要からその手段＝道具を作った。石器は人間の労働手段であり、手の延長である。コンピューターもロボットも人間が労働活動を通して得た知識と経験をもとにして作った労働手段であり、人間の労働上の必要によって利用される。つまり、ロボットは本質上石器の延長なのだ」

　ところで、ロボットの製作者はこう反論する。「ロボットは人間に代わって働き、人間の行動をもコントロールしている。科学技術が発達した今日の世界では、ロボットによって人間が疎外されさえしているのだ」

　ここで勝敗の判定を下す前につぎのような昔話を考えてみよう。

　昔ある村に、欲張りの地主と作男が住んでいた。ある日、地主が作男に向かってどやしつけた。「腹一杯食わせているのに、なんだこの仕事のざまは」

　作男は「風邪で体がぞくぞくして、言うことを聞かねえですだ」とけだるそうに答えた。

　地主はかんかんになって「こやつ、お前が仕事をするのか。飯が仕事をするんじゃ」と怒鳴りつけ、作男を野良に追いやった。

　しばらくして地主が畑に行って見ると、なんと、作男は畑のかたわらに寝ころんでいるではないか。

「こやつ、なんで仕事をしないんだ」

　作男は寝ころんだまま、ぶっきらぼうに答えた。

「畝間に飯を置いときましただ。きょうは一所懸命やってくれって言いましてね」

またある日、作男が牛に犂を引かせて畑を耕しているありさまを眺めていた地主が、「牛の奴、りっぱなもんだ。仕事は確かに牛がする」と言って立ち去った。

あくる日、また畑にやってきた地主はびっくりした。牛が畑の青ムギを食べているのに、作男は昼寝をしているのである。地主は真っ赤になって叫んだ。

「こんちくしょうめ、昼寝ばかりしやがって、仕事はしないつもりか」

作男は平気な顔をして、「旦那さんが、仕事は牛がするとおっしゃったじゃねえですか。それで牛を畑に放しましただ」と答えた。

地主はこの作男を追い出して、別の若い男を雇った。

「なあ、おまえにひとつ聞くが、仕事をするのは牛かな？　それとも人間かな？」

「そりゃ、人間に決まってますよ」

若者は、こう言い残して出て行ってしまった。この噂は村中に広まり、それ以来この地主には誰も雇われようとしなかった。それで、地主はとうとう落ちぶれてしまったという。

昔話ではあるが、そこには深い哲学的な意味がこもっている。つまり、自然を改造するのは人間であり、労働用具や技術手段はすべて人間の利用物にすぎず、それ自体には創造的能力がないということである。言いかえれば、労働用具や科学技術手段は人間が作り出したものであり、しかも、人間と結びつき人間に使われてこそ、はじめて自然改造の手段としての使命を果たすことができるという

ことである。人間と結びつかず、人間によって使われない手段は、屑鉄と変わるところがない。

万物の創造者である人間とその手段との間の関係をねじ曲げるのは、労働をさげすみ、勤労者を搾る搾取者の論理にすぎない。

自然を改造する創造の主人･担当者は人間である。

それは、人間が自己の自主的な要求を実現するための創造性を本質的な属性としているからである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「人間は創造性をもつ存在、創造的な社会的存在であります」

自主性とともに創造性は、社会的人間の今一つの本質的な属性である。

人間の活動の源泉である自主性が、人間に活動の目的と方向を示し、実践へと動かす社会的人間の属性であるのにたいし、創造性は、その自主的要求に合わせて目的意識的に世界を改造し、自己の運命を開いていく社会的人間の属性であり、自主的要求をみたすための活力の源泉である。

人間以外の生命は、自然をあるがままに利用し、また、それに順応することによって生存を維持する。いかに発達した動物であっても、動物には世界を改造し、利用する能力がない。

では、サルのように石や棒を使って食べ物を得たり、ビーバーのように巣を作るために木をかじり倒してダムを作ったりすることは、どのように解釈すべきであろうか。

そうした活動は創造的なものではなく、環境に順応して生きる過程に固まった本能的な習性である。何千何万年も前から土を掘って生きる動物は、相も変わらず土を掘り、樹上に巣を作る動物はそ

れ以外の方法を知らない。サルの場合も昔から石や棒を使ってはいるが、そのようなものを作り出したり、改良したりするようなことはしない。

人間は自然を改造し、天然には存在しない新しいものを作り出しながら、環境を自分たちに有利に変えていく。人間はまた、生活に不利な古い社会的関係をも改造、変革して新しい社会的関係をうち立て、自分たちに有利な社会的条件を作り出しながら自主性をよりよく実現していくのである。

社会的人間の創造性は創造的能力として発現し、創造的能力は創造性を裏打ちする。

人間の創造的能力は、社会的、歴史的に蓄積された知識や技術、技能、経験、それに体力など、人間の内在的な能力である。

知識や技術、技能、経験は、人間に、改造し、変革すべき対象の本質と運動発展の合法則性を把握させ、改造と変革の方向と方法を教える。人間の体力は創造的能力の生理的基礎である。科学技術と体力は一つに結びつくことによって、社会的人間に特有な創造的能力となるのである。

人間の創造的能力は、意識の支配下に一定の志向性をもって、統一的に作用する能力だということに、その特性がある。

創造性が社会的人間の本質的属性の一つであるのは、第 1 に、それが世界と自己の運命を開いていく社会的人間の生命力だからである。動物は自然に本能的に順応するが、人間は世界を改造し、新しいものを創造しながら生きてゆく社会的存在である。

人間の創造力は社会的集団によって形成される集団的な創造力であり、社会的、歴史的に蓄積され、社会的な方法によって継承さ

れ、発展していく社会的能力である。動物は、個体が自然に順応していくなかで形成された順応力を遺伝的に子孫に伝えていくが、人間は社会的教育を通して、歴史的に蓄積された知識と技術、技能、経験を子孫に伝える。

第 2 に、創造性は人間のあらゆる活動に一貫している根本的な属性だからである。人間のすべての活動は本質において、自主性を実現するための創造的活動である。

自然を改造するための創造的能力は、知識と技術、技能、経験、体力の総体であるが、社会を改造し、変革する創造的能力において基本をなすのは、組織的および思想・意志的な結集力である。一つの社会的集団に一つの思想・意志をもって組織的に結集した人民の力は、いかなる反動勢力の抵抗をも打破して、社会の変革を押し進めていく不抜の創造的力である。

7　「人間の危機」の主唱者たち

近年、欧米諸国では、科学技術の発達にからめて、「人間の危機説」が取り沙汰されている。

生産の全面的オートメ化、経済管理のコンピューター化が実現し、宇宙では人工衛星が飛びかって、人間の創造力が地球圏外にまで拡大しているとき、「人間の危機」が叫ばれているのである。

工業の急速な発展が大気や水、土地を著しく汚染させて生態環境を破壊し、さらには、炭酸ガスの大量放出による地球温暖化の影響で、南北両極地帯の膨大な氷山が解けて、世界が第 2 の「ノアの

洪水」に見舞われる恐れがあり、かてて加えて、オゾン層の破壊によって、地球上の生物が死滅するかも知れない、と言うのである。

アメリカのある遺伝学教授は、遺伝子工学の発展が「人間の危機」を招いていると指摘している。かれは遺伝子工学が、例えば、生殖も運動も発声もできないガマを作り出しているとし、これが人間に適用されれば、コンピューター操作によって働きバチのように働くことしか知らない人間や喧嘩のほかは何もできない人間を作り出し、繁殖させることができると言うのである。

新「人間機械論」者は、生産のオートメ化が人間を機械の付属物に変え、「機械による人間の構築・支配」という新たな「人間疎外」現象を生み出しており、人類は「難破船の乗客」の運命を免れなくなったと主張する。

原子力の開発によって人類は第 3 の火を持つことになった。ところが、それはまず原爆として出現し、日本の二つの都市を瞬時に灰燼に帰せしめた。引きつづく水中核実験や空中核実験によって、地球は著しく汚染され、人間の生活を脅かしている。

今、多くの国に「未来学会」や「21 世紀委員会」などというさまざまな研究団体が存在しているが、それらはおしなべて、未来社会にたいする失望を表明している。

科学技術の発達がこのように、人間の生存に危機をかもしだしていることは疑いない事実であるが、だからといって、科学技術発達の本質を見落としてはならないであろう。

「人間の危機説」は未来のない反動的搾取階級の不安と絶望を反映した悲観論であり、その一方では人民を愚弄し、低賃金と長時間労働、解雇に文句をつけさせないための詭弁である。

科学技術発達の本質は、チュチェ思想の世界観、言いかえれば、世界と人間の関係についてのチュチェ思想的見解によってのみ正しく見きわめることができる。

科学は人間が世界を改造し、支配するための知的武器であり、技術は世界を改造し、変革する創造的活動の手段である。科学と技術は、世界と自己の運命を開いていく人間の創造的能力の現れである。科学技術はその発達を通して、人間の創造的能力と、世界を支配し、改造する人間の地位と役割を高めていく。科学技術の発達水準は、人類が到達した世界の支配と改造の水準を表現する。

科学技術の発達を無視しては、世界を改造し、支配しながら自己の運命を開いていく人間の活動について考えることができない。

客観的運動法則を無視してはならない。それを無視すれば自然の改造は不可能になる。

今問題とすべきは、科学技術がその本性と使命に即して人間の自主性の実現に正しく利用されていないということである。「人間の危機説」は反動的搾取階級が科学技術を、人民の膏血を搾り、その自主性を蹂躙し、ひいては他民族を従属させる武器とならせ、人民を愚弄しながら最大限の利潤を追求する手段とならせるということに、その真意がある。

科学技術をその本来の使命に即して正しく利用するならば、世界の支配者･改造者としての人間の地位と役割はいっそう高まるであろう。

キュリーは、1903 年のノーベル物理学賞受賞記念講演で、「ラジウムが犯罪者の手に落ちれば、非常に危険です。そのようなわけで、人間が自然の秘密を知ることがよいことなのか、そこから利益を得

るほど十分に人間の精神が成熟しているのか、という疑問を拭いきれません」と語った。

第 2 次世界大戦中、核分裂の連鎖反応を最初に成功させたレオ・シラードは、それが原子爆弾の製造に利用され、広島と長崎の市民数十万の生命を奪い、都市を灰燼に帰せしめたことを知って、物理学の研究から手を引いてしまった。

最初の原子爆弾を製造し、実験し、使用する「ロス・アラモス」計画の責任者であったロバート・オッペンハイマーは、自分の指導のもとに作られた原子爆弾の破壊力の恐ろしさに長年苦悩し、1967年、「われわれがおこなってきた仕事は人間の生存権を変化させた。しかし、こうした変化をもたらした原子力の利用問題は政府の問題であって、科学者の問題ではない」と語った。

1935 年、アルバート･アインシュタインとバートランド･ラッセルは、『ラッセル—アインシュタイン宣言』で「われわれは人類最後の時代に生きているのかも知れない。もしそうだとすれば、人類の滅亡は科学によるものである」と憂えた。

科学者は、科学者である前に、人間を熱烈に愛することが大切である。そうなってはじめて、人間の自主性の向上に貢献する科学技術を開発し、さらには、それが人間の自主性を蹂躙する武器として利用されることを拒めるようになるのである。

科学者に人間を愛する思想がなければ、科学技術が人間の自主性を蹂躙しようとする反動的搾取階級に利用されることを許し、あるいは、それを傍観する卑劣な人間に堕するであろう。そうすることは、人類にたいする重大な犯罪である。

反動的搾取階級は、愛国心に欠けた科学者を買収し、あるいは

強制して、犯罪の道へと引き入れている。

1952 年 10 月、「アジア・太平洋平和会議」でおこなった演説で、ジョン・ヒルトンは、人間のための科学者になろうと呼びかけ、こう語った。

「わたしは長崎に最初に投下された原爆の製造に参加した者です。今わたしは、深い罪の意識を覚えており、人類にたいする犯罪行為にわたし自身が一役買ったことを恥ずかしく思っております。どうしてわたしが原子爆弾の製造という仕事に参加するようになったかといえば、それは『科学のための科学』という誤った哲学を信じたからです。科学を社会生活と人間から切り離したために生じたこのような過ちによって、わたしは戦時に原爆の製造に参加したのでした。われわれ科学者は純粋に科学に献身すべきである、その他のことは技術者や政治家の仕事である、と考えたものでした。わたしは、現在原子兵器や細菌兵器の製造に従事しているアメリカと日本の科学者に訴えます。『あなたたちは自分が今何をしているかをよく考えてみなさい』と」

ジョン・ヒルトンの指摘はわれわれに、科学者は人間愛の哲学を信念として科学を研究しなければならず、科学そのものには階級性がないが、その利用問題では、誰のために役立てるべきかというしっかりした観点に立たなければならないということを示唆している。このような信念がなければ、科学者は祖国と人民を愛し、人民の自主性の実現に必要な科学を研究する人間になれない。

科学と技術は、人間の自主性を実現するための力である。科学技術発達の担い手は人民だから、科学技術が人間を脅かす存在となってはならない。

今日、アメリカをはじめ欧米列強は全人類を 30 回も全滅させるだけの膨大な核兵器を保有している。進歩的人類は反核・反戦運動を強め、核廃絶のたたかいを全世界的な広がりをもって強力に展開しなければならない。このことは朝鮮の場合、とりわけ切実な問題である。南朝鮮の歴代政権は朝鮮半島で核戦争の危機を増大させてきたが、前「大統領」金泳三（キムヨンサム）は、「さる朝鮮戦争の際、マッカーサーの主張に従って原爆を使っていたなら、国は統一されていたであろう」と放言している。

「人間の危機」は科学技術の発達それ自体がもたらしたものではなく、人民の自主性を無視し、歴史の流れに逆らおうとする反動的な統治者によってかもしだされているのである。したがって、ここで明白に言えることは、「科学のための科学」「純粋科学」という誤った哲学に縛られて、祖国と人民を愛する思想･感情に欠けた科学者や反動的統治者に、「人間の危機」の責任を問わなければならないということである。

8　「シシュフォスの押し上げる岩」

世間には、意味もなくくりかえされる行動を評して、「結果のない永遠な運動」をつづける「シシュフォスの神話」を引き合いに出す人がよくいる。

ギリシア神話のコリントス王シシュフォスは、ゼウスに背いて神罰を受ける。地獄の大岩を山の上へ押し上げる刑罰で、その岩が山の頂上へ近づくと、岩は必ずかれの手からすべり落ちて元の場所

へころがり戻る。こうして、かれは永遠に岩を押し上げるのである。
シシュフォスの神話は、人間が盲目的にいつまでも同じことをくりかえすことが最大の刑罰であるとして、人間から目的意識性を取り去れば、動物にも劣る存在になるということを教えている。「獣も一度はまった道は二度と通らない」というが、シシュフォスはなんらの抗拒もせず、そこから抜け出ようとあがきもしないで、宿命に甘んじ、同じ動作を永遠にくりかえすのである。
目的意識性を取り除かれることが、人間にとってどうして最大の刑罰となるのだろうか。
人間はほかならぬ意識性を持つ存在であり、そのために、他のすべての存在よりすぐれた有力な存在となるのである。
人間は自主性や創造性とともに、意識性を本質的属性とする社会的存在である。
金正日総書記はつぎのように述べている。
「人間は意識性をもつ存在、意識的な社会的存在であります」
人間は意識性を本質的属性とする社会的存在である。
意識性は意識を持つ人間に固有な性質である。
意識は脳の機能であり、世界を反映する観念であるのにたいし、意識性は人間のすべての活動を規制し、コントロールする性質である。言いかえれば、それは、世界と自分自身を把握し、改造するすべての活動を規制する社会的人間の属性である。
ハチが巣を作り、クモが糸を張る作業を詳しく観察すると、それは有能な建築家や熟練した機織り工も舌を巻くほど、精巧きわまりない。けれども、いくら下手な建築家や機織り見習い工といっても、かれらの働きぶりは、ハチやクモのそれよりもはるかにすぐれ

ている。なぜだろうか。

機織り工は、布を織る前に、糸の質や織り物の文様など機織りに必要な全工程を事前に構想し、結果を見込んで布を織る。同じように、いくら粗末な家を建てる人でも、たとえ大ざっぱではあっても、出来上がりを頭に描いて仕事にとりかかるものである。しかし、動物はそのように、構想や計画を立てるようなことはしない。

人間の活動は目的意識的なものであり、動物のそれは本能による無意識的な活動である。このように、人間と動物の間の根本的な活動上の相違は、意識性の有無にある。

もちろん人間の身体も生命有機体であるのだから、食べたい、眠りたいなどという本能的欲求を持っている。しかし、動物はただ本能に従って行動し、本能を制御することができないが、社会的存在である人間は、自分たちの社会的な関係と社会における生活上の要求を自覚しており、本能を制御する力を備えている。

動物の曲芸を見ると、それがあたかも意識的な行動であるかのように見えることもある。動物園で見るチンパンジーの生活には興味がそそられる。チンパンジーは、自分の檻をほうきで掃き、管理人が鐘を鳴らすと、お膳を運んできて、スプーンで飯を食べ、そのあと、お膳を片づけて管理人に挨拶をする。見物人がからかうと、歯をむいて怒り叫ぶ。けれども、チンパンジーのそうした行動は目的意識的なものではない。ハチやクモの行動が、もって生まれた本能によるものであるのにたいし、チンパンジーの行動は、脳の発達した高等動物に見られる第２の天性、即ち訓練による条件反射である。訓練を受けていないチンパンジーは、目の前にスプーンや食器などがあっても、それを使おうとはしない。

動物園で見られる動物の奇抜な動作は、長期の訓練によって習慣づけられたものである。だから、動作の順序や曲芸用具の形と色、それに指図の仕方をわずかでも変えると、動物曲芸はたちまちのうちに目茶苦茶になってしまう。

それでは、社会的人間の本質的属性としての意識性はどのように表現されるのであろうか。

それは第 1 に、人間が世界と自分自身を把握するためのすべての活動を、その自主的な要求と利害関係に従わせていくようにすることで表現される。

動物とは違って、人間の活動にはすべて意識された目的がある。人間は何を見、どのように行動するかにかかわりなく、つねに自主的な要求と利害関係を踏まえて事物を考察し、目的を立て、行動するものである。

意識性は第 2 に、事物を意識し、実行するなかで発揮される人間の意志と闘争力を規制することで表現される。

人間は意識性を持つため、目的の成就に向けて忍耐強く、果敢に、最後までくじけることなく、それに取り組むのである。

人間のこのように強靭な意志と闘争力は、自主的要求の自覚にもとづく意識性の現れだと言える。

したがって、人間にたいする罪悪のなかでも最大の罪悪は、かれらの意識を麻痺させ、去勢することである。

他方、人間にたいする最大の愛は、かれらが自主的な要求を自覚し、自己の運命の主人として人間らしく生きるためのたたかいに奮い立つよう啓発することである。

9　人間は「ロバ」にはなれない

人間の思想には空白がありえない。

自主意識でなければ屈従意識、集団主義的な意識でなければ個人主義的ないし利己主義的な意識が人間の頭脳を支配していると言ってよい。

思想意識が人間の活動で重要な役割を果たすということは、誰もが認めるところである。

思想意識の役割を思想論的に定式化し、展開したのは、チュチェ思想である。

哲学史をひもとけば、思想意識の役割について多くの論議がなされてきたことがわかるが、観念論では意識の役割が神秘化され、マルクス主義以前の唯物論では、意識の役割が過小評価されていたと言える。マルクス主義哲学は、社会的存在が社会的意識を規定し、社会的意識は社会的存在にたいして反作用すると見た。

思想意識の役割にたいする理解で、マルクス主義の持つ限界性は第１に、思想意識を社会の物質的関係のたんなる反映とみなしたために、思想の本質と知識一般とを区別することができなかったことにあり、第２に、思想意識の役割を意識と世界との関係という観点からとらえたことにある。

チュチェ思想によって思想論が定立されえたのは第１に、世界を反映した知識一般と人間の要求ないし利害関係を反映した思想意識を明確に分離したことにある。

知識と思想意識は、その源と内容において互いに区別される意

識の二つの側面である。

知識の源は客観的な事物現象であり、思想意識の源は人間自身の社会的要求である。また、知識の内容が事物現象の本質および運動法則であるのにたいして、思想意識の内容は社会的人間の利害関係である。

思想論は第 2 に、思想意識と世界との関係ではなく、思想意識と人間の活動との関係問題を提起し、思想意識が世界への反作用としてではなく、人間の活動における能動的作用としてとらえたことにある。

チュチェ思想は、世界の主人であり、すべてを決定する存在である人間が、世界の主人としての地位を占め、主人としての責任と役割を全うするうえで、思想意識が決定的な役割を果たすという思想論をうち出した。

一部の学者はこれにたいして、「思想がすべてを決定する」ということは、思想が世界の存在と運動発展を決定するということを意味するから、これは観念論だとして、排撃している。なんという愚かな指摘であろうか。思想意識が人間の活動を決定し、また、チュチェの思想論が意識と世界との関係ではなく、思想意識と人間の活動との関係を明らかにしたものであるということを理解する能力がかれらには欠けているのであろう。そうでなければ、チュチェの思想論を意図的にねじ曲げる行為だというほかない。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「思想･意識は人間のすべての行動を規制し調節、統制します」

思想意識が人間のすべての行動を規制するのは、それが社会的人間の要求と利害関係を反映した意識だからである。

思想意識は何よりも、人間の活動の目的と方向を決定する。人間の活動は生活上の要求と利害関係にもとづいておこなわれる活動である。人間の活動の目的をどこにおくかということは、あくまでも人間の生活上の要求と利害関係によって決まるのである。

利己的な人間は、祖国と民族の自主性などは眼中にもなく、ただ個人の安逸と享楽のみを生活の目的とする。

社会的人間の自主的な要求と利害関係を反映した自主的な思想意識を持つ人間は、民族および人民大衆の自主性の実現を生活と活動の目的としている。

思想意識はつぎに、目的を達成するためにはどのような手段を選び、それをどのように利用すべきかということを決める。

人間の活動は、一定の手段をもって、人間の肉体的および精神的な力をフルに働かせていく創造的な活動である。思想意識は人間の生活上の要求と利害関係を反映した意識であるため、目的の達成手段を選択する尺度を定め、人間の精神的および肉体的な力を働かせていく、行動のあり方と方法を決定する。

利己的な人間は個人の安逸と享楽を求め、カネにものを言わせて目的の達成に狂奔し、自分に有利であれば、犯罪的方法にもためらいなくとびつき、目的を遂げるためには犯罪行為も平気でするが、いったん生死の岐路に立たされると、目的を放棄して中途でなげだすか、心変わりするのが利己主義者の行動のあり方である。かれらはそのような場合、目的はもはや眼中になく、命あっての物種とばかりに、恥も外聞もなく立ち回るのである。だから、利己主義者には、強い意志も、清い節操もありえない。

人間の自主的な要求を反映した自主的思想意識の持ち主は、民

族と人民大衆の自主性を実現するもっとも有力な手段が、カネや財物ではなく、民族と人民大衆の創造的な力であると見る。かれらは、民族と人民大衆の創造力を全面的に引き出してすべての問題を解決し、その途上で強い意志を発揮し、心要ならば、ためらいなく一命をもなげうち、それを誉れとする。

軍事ファッショ政権の暴圧に抗してたたかった南朝鮮の朴鍾哲（パクジョンチョル）は、「歴史の車輪はきょうも休まずに回転している。しかし、歴史と自分、世界と自分との関係で、自分を能動的な主体として位置づけるか、それとも受動的な客体として位置づけるかによって、その意味は異なる。この地の主人とこの歴史の主体は、民衆以外の誰でもない」と言って、自主、民主、統一をめざすたたかいにわが身を捧げた。かれは、自分の主体的な信念について、「かれらはぼくの身体を拘束しているが、ぼくの思想と信念は決して拘束できません」と宣言した。

ここで、思想意識が人間のすべての活動を決定すると言うとき、それは、人間の自主的な本性、即ち、あらゆる従属と束縛から解放されて、世界と自己の運命の主人として生きようとする要求と利害関係を反映した自主的な思想意識が、人間の運命を開くたたかいで決定的な役割を果たすという意味だということを強調しておきたい。

階級社会で人間の生活上の要求と利害関係は階級的な境遇とかかわっているため、人間の思想意識が必ず階級的性格を帯びるということに留意する必要がある。

ところで、ここで明らかにしておきたいことは、社会的·階級的境遇によって利害関係が異なるということは、個々人の場合よりも社会的集団の場合を念頭においた指摘だということである。個々人

の思想意識は階級的境遇とかかわっているとはいえ、必ずしもそれによって決定されるというものではない。多くの場合、かれが受けた教育と教養によって、それは決定されるのである。歴史は、搾取階級に属する人間であっても、自分の階級の反動的本質を知り、先進的な思想を受け入れたときは、自分の階級の枠を越えて人民大衆の自主性をめざすたたかいに合流するという、多くの実例を残している。

民族の自主性を外部勢力に売り渡して権力の座についた事大主義的売国奴や、人民大衆の自主性を踏みにじって腹を肥やす反動的搾取階級には、ただ食わせてさえいれば喜んで従う奴隷、つまりロバのようにくびきを掛けられ、主人の命ずるままに、死ぬまでおとなしく働く人間だけが必要である。かれらはそのような人間を、「働き者」「良民」などと言ってたたえ、人民大衆の間に個人主義や利己主義、無抵抗主義を広めるために躍起になっている。

しかし、そのような思想は、人民大衆に無理強いはできても、決してかれら自身の思想にならせることはできない。なぜなら、それが人間の自主的な本性とは相容れない思想だからである。

10　ロビンソン･クルーソーとオオカミ少女

これまで、自主性と創造性、意識性が人間の本質的属性であることを見てきたが、ここでは、どうして人間がそれを本質的な属性とするようになったかについて見ることにしよう。

ここに興味ある実話がある。1920 年、インドのコタムリ村付近

の森林で、オオカミに育てられた二人の少女が発見された。8 歳ほどと 2 歳ほどの子供で、恐らくオオカミの乳を飲んで育ったのであろう。

孤児院に連れていかれた 2 人のうち、幼い方の子はまもなく死んだ。上の少女にはカマラという名前が付けられた。最初、カマラはオオカミと同じ習性を示した。食べ物は手を使うことなく、いきなり口で食べ、日中は眠るかぼんやりとして時間をすごし、夜になると活動をはじめる。発声はけものの吠えるような声を出すだけであり、人の話すことにはまるで関心を示さなかった。四つ足で歩き、それがあまりにも敏捷なので、つかまえるのに一苦労するほどであった。孤児院生活をはじめて 2 年がたったあとでも、死んだニワトリを見つけると、茂みの中に持って行って食べるのだった。5 年後にようやく両足で立てるようになり、数語が発声できるようになった。

カマラは人間の子であるにもかかわらず、社会と断絶されて育ったため、人間の社会的属性を持てなかったのである。

この実話は、人間の本質的属性が、何か神秘な存在によって与えられたものでないのはもちろん、生まれるときに親から譲り受けた天性でもないということを語っている。

もちろん、人間は他の動物には見られない発達した有機体を持っている。しかし、発達した有機体そのものが社会的属性を生むのではない。発達した有機体は、社会的属性の物質的･生物学的基礎にすぎない。

人間の社会的属性が生物学的進化過程に獲得されると見るのは、誤った考え方である。社会的属性は、社会的関係のなかで形成され、

成長するのである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「自主性、創造性、意識性は社会的、歴史的に形成され発展する人間の社会的属性であります」（同上 20 ページ）

人間は社会のなかで生き、成長する過程で社会的教育を受け、社会的関係のなかで人類が歴史的に蓄積してきた物質的および精神的富を譲り受けていく。そして、その富を利用して、自主性を実現するための創造的活動をくりひろげるのである。

社会と全く絶縁している人間には、自主性も、創造性も、意識性も備わっていない。

こう言うと、ロビンソン･クルーソーの例を引き合いに出して、反駁する人がいるかも知れない。

ダニエル･デフォーの長編小説『ロビンソン･クルーソー』は、カリブ海のドバゴ島が無人島であったとき、セルカークという人物がそこに漂着し、数年間孤島生活をした実話を種にして書かれた。

ロビンソン・クルーソーは人間世界と断絶されて、26 年間、独りで暮らした。かれは小屋を作り、カモシカを飼い、獣皮で衣服や履き物をこしらえ、のちには穀物を栽培し、丸太で筏を組み、言葉を忘れてはと、いろいろなものに名前を付けて、独りで対話をする。かれは明らかに自主性と創造性、意識性を持つ社会的人間であった。

そういうロビンソン・クルーソーを、インドの森林の中で見つけたオオカミ少女カマラと比べるとき、どう解釈すればよいのだろうか。

ロビンソン・クルーソーの自主意識と創造的能力は、かれがも

って生まれたものではなく、また、孤島に漂着したあとで生じたものでもない。かれは無人島に漂着する前、すでに社会的教育を受けてさまざまな知識を身につけ、経験も積んでいた。それに、社会的な創造的能力が具現された銃や火薬、刀剣、衣服や履き物なども持っていたのである。かれは、絶海の孤島で独りで生活したけれども、社会生活のなかで獲得した自主性と創造性、意識性を持つ人間であった。だからかれは、無人島の自然を自分の生活上の要求に合わせて改造し、生活上の条件や手段を整えながら、長い歳月を生き延びることができたのである。もし、ロビンソン・クルーソーが社会的属性を持たない、本能的な順応力だけを持つ存在であったならば、突然変化した環境にうちかつことができなかったであろう。

　ここで一つ強調しておきたいことがある。それは、社会的関係のなかで社会的属性が形成されるからといって、人間以外の動物を人間社会で育てても、社会的属性が備わるというようなことはありえないということである。

　ヨーロッパには愛玩用のイヌを飼う人が多いが、かれらがいくら莫大なカネをつぎ込んで、イヌに靴を履かせ、帽子をかぶせ、首飾りをつけて高級ベッドに寝かせ、特別料理を食べさせても、イヌはどこまでもイヌであって、必要な生物学的基礎が欠けているイヌに社会的属性が備わるようなことはありえない。ただ、人間だけが社会的な存在として、社会的属性を持ちうる肉体構造と生物学的基礎を備えているのである。

　人間の本質的属性である自主性と創造性、意識性は、社会的関係のなかで形成され、発展する人間の社会的な属性である。人間の社会的属性である自主性と創造性、意識性の内容とレベルは、どの

ような社会的教育を受け、いかなる実践活動をおこなうかによって決まると言える。

11　社会的集団と自我

人間が社会的存在であるということは、人間が集団的な存在だということであり、その本質的な特性は、人間が自主性と創造性、意識性を持つ集団的な存在であるということにある。

人間が社会的存在であるということはまた、人間が集団のなかでだけ人間として生きることのできる、集団的な存在だということである。

人間の苦痛にはいろいろなものがありうるが、そのなかでも最大の苦痛は、社会から疎外され、社会的に孤立することであろう。だから「この世で一番恐ろしいことは孤独である。孤独は死に等しい」とさえ言われているのである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「世界で社会的関係を結んで生活し活動するのはひとり人間だけです。人間は社会的にのみその存在を保ち、自らの目的を実現していきます」

社会的存在とは、社会的関係を結ぶことによって、自らの存在を保ち、社会的関係のなかで、自己の目的を遂げながら生活し活動していく存在のことである。言いかえれば、社会的存在とは、共同の目的と利害関係を社会的な協力によって実現しながら生活し、活動する存在だということである。

社会的存在とは、何よりも社会的集団の一構成員であるということを意味する。社会的集団は共同の目的と利害関係によって結ばれた人びとの有機的な組織体である。したがって、人間が社会的存在であるというとき、それは、かれが社会的集団の一構成員として、社会共同の要求と利害関係を自分自身の要求とし、利害関係とする存在だということである。ここで、人間が社会的集団の一構成員であるということは、かれが社会的存在としての基本的な資格を持ち、基本的な表徴をそなえているということだと言える。

社会的集団には、血縁関係をもとにした集団の要求や利害関係を共同の要求、利害関係として、それを各構成員の根本の要求、利害関係とするものもあれば、民族的自主性を共同の要求、利害関係として、その実現に努めるものもあり、また階級の自主性を根本的な要求、利害関係として、個々の構成員がそれを自分の根本的な要求、利害関係とするものもある。しかしながら、各人の利己主義を根本的な要求、利害関係とし、利己主義という共通性で結ばれるような集団は、人間の有機的な組織体にはなれない。それは、利己主義という共通性で結ばれた集団である場合、つねに個々の人間の利己的な要求、利害関係が第一義的なものとされ、各構成員は状況が変わると、それぞれの利益を求めて離合集散するからである。

共同の要求や集団の利害関係が各人の根本的な要求にならないと、社会的集団は成立するはずがなく、人間の社会は形成されえなかったであろう。

集団とはたんなる人間の群れではなく、また、社会的につながっているからといって、集団が成り立つものでもない。市場にむらがる人びとを指して、社会的集団ということはできない。かれらは

物品の売買を通して社会的に結ばれてはいるが、目的と利害関係の一致した有機的な組織としての人間の集団ではないのである。

つぎに、社会的存在とは、人類が蓄積した物質的および精神的な富を共同で利用しながら自然と社会を改造し、変革する活動をおこなう存在である。つまり、人間は、一個人の力では生存に必要な物質的および精神的な手段や生活条件を作り出すことができない存在、言いかえれば個々の人間が孤立しては生きてゆけず、ただ集団をなして互いに協力することによってのみ生きてゆける、集団的・社会的存在である。

人間は、社会的関係のなかで社会的集団の力に依拠することによって、自然界から抜け出し、自然を人間に有利に改造していく存在になったのである。

人類がかれらを脅かしていた自然界からどうして抜け出せたのか、という疑問にたいして、人類学や歴史学は、火の発見と道具の製作が人類の発展にとって極めて重要な出来事であったと強調しているが、それ以上に重要な点は、人類が集団をなして共同生活を営んできたということではなかろうか。

進化の途上にあった人間は、猛獣とのたたかいをはじめ、巨大な自然とのたたかいに、社会的集団の力をもって取り組んだのである。猛獣とのたたかいは原始時代の人間にとって、食うか食われるかの死闘であった。巨大な自然とのたたかいのなかで形成された最初の人間集団においては、自我の観念がなかった。集団の一構成員であることはかれらにとって、何よりも生存の必須の要求であり、集団の要求はとりもなおさず、個人が生存するための第一義的な要求であった。集団を離れた個人は、恐ろしい自然とのたたかいで生

き残ることができなかった。社会的集団をなした人間だけが、巨大な力を持って自然に立ち向かい、自然に順応する存在ではなく、それに対抗し、自然を自分の要求に合わせて改造していく社会的存在になりえたのである。

こうしてみると、人間の集団生活＝共同生活は、人類が自然界から抜け出し、自然を支配する前提、つまり人類発展の根本的な要因であったと言える。

こうした観点から人間の本質を考察するとき、社会的存在についての誤った解釈を無心に見すごすことは許されるべきでない。もしそれを許せば、人間の本性にかんする根本的問題についての誤った解釈が社会に広く流布する極めて有害な結果を招かないともかぎらないのである。

ある保守的な神学者は、社会的存在の意味を「共存共生」に求めて、「人間存在の基本は隣人とともにいるということにある。われわれがこの世に存在するということは、隣人とともにいるということを意味する。だから、われわれが人間であるのは隣人とともにいるという意味である」と言った。

人間が社会的存在であるということは、もちろん隣人とともにいることを前提としている。しかし、それは社会的存在の本義ではない。生物界のミツバチやアリのように群れをなして生存する動物もあれば、巻き貝類やクラゲのように共生する生物もある。

「弱肉強食」とともに、「共存共生」も生物界の自然法則である。それは動物が本能によって環境に順応した結果生じたものである。隣人との共存や共生を社会的存在の本義と解釈する保守的な神学者は、そうした観点から「博愛」をとなえているが、その実、搾取と

抑圧、それに植民地と宗主国の主従関係を、必要なものとして受け入れるべきだと説教しているのである。

しかし、「現代の神学」を奉ずる良心的な宗教家は、個人の救いは社会の救いによって達成され、社会の救いは社会体制の根本的な変革によってのみ実現できるとし、社会共同体と個人を切り離して考えてはならないと主張している。チェ・ゲバラが率いるゲリラに加わって戦死したコロンビアの神父カミロ・ロレスは、自著『キリスト者の使命』のなかで、「わたしは、司祭を辞職したのではない。わたしが革命に参加したのは、キリスト教の隣人愛からである」と述べている。

ひところ、広く人びとを引きつけた実存主義は、集団と個人の間に越えることのできない壁を築き、互いに分離、対立させながら、「人間は反社会的個体」であり、「集団や集団性は人間の個性を抹殺する」「人間は個体として生まれ、個体として生き、個体として死ぬよりほかにない存在」だとした。人間がただの個体であるならば、環境に盲目的に順応する無力な生物学的存在にすぎなくなる、実存主義の狙いがここにあることを見すごしてはならない。

12　人間が人間としての本分を全うするためには

人間が人間としての本分を全うするためには、社会的な集団のなかで生きなければならない。

社会的存在のもっとも本質的な表徴は、社会的集団の一構成員として、集団の共同の要求を自分の根本的な要求とし、その実現に

尽くすということにあるという意識が、昔から普遍的な社会通念となっている。それで、社会的集団のために献身する人を、世人はもっとも美しい人間として尊敬してきたのである。

社会的集団の共同の要求、つまり人民大衆の自主的な要求と利害関係を自分の根本的な要求とし、その実現に献身する人間こそ、まっとうな人間であるという立場から世間に目を向けるとき、「人間らしくない人間」はたやすく識別できるであろう。

自分の死後も来世で永遠な幸福を享受したいとして、10 万の奴隷を使い、30 年という年月をかけて総計 600 万トンの巨石をもって 148 個のピラミッドを築いた古代エジプトのファラオ（王）たちにあやかりたいと願う人間が、今日も地球上にいないとは言えない。

元満州国皇帝溥儀は、日本のかいらいであったが、私生活においても、他人が口に入れてくれるものを食べ、衣服も他人が着せるものをまとうという文字通りの操り人形であった。無為徒食するこのような寄生虫は、創造性を持つ人間とは言えない。特権層に特有な社会的属性は、このような寄生性にある。

人間が社会的存在として、人間本来の使命を全うするためには、自主性と創造性、意識性を不断に高めていかなければならない。さもなければ、そのような人間はまっとうな人間として生きることができないであろう。

ここで、興味深いある国の言語慣習をひとつ紹介しよう。

その国では、「あなたは人間か」という質問にたいする答えが、青少年期と壮年期、老年期によってそれぞれ異なるという。青少年は「わたしは人間になります」と未来形で答え、壮年は「わたしは人間です」と現在形で答え、年寄りは「わたしは人間でした」と過

去形で答えるのがこの国の言語慣習で、それが語法上正しいとされている。

よく考えてみると、そこには深い意味がこもっている。つまり、人間は人間の本分がまっとうできてこそ人間だという概念が、この国の人たちの言葉づかいに表現されているのである。

それでは、どのように生きる人間が人間としての本分を全うしていると言えるだろうか。それを要約して言えば、社会的人間としての本質的属性、即ち自主性と創造性、意識性を持ち、社会的人間としての本来の使命を果たすような人間が、人間の本分を全うする人間だと言える。

社会と集団に尽くすためには、それに必要な人間の属性、つまり自主性と創造性、意識性を高めていかなければならない。

自主性をめざす民族と人民大衆の闘争の歴史と教訓、その実現方途を示す人間中心のチュチェ思想とそれを具現するための方法論を体得してこそ、人間は自己の使命と役割を全うしていけるのである。

自主的な思想意識を高めないでは、人民大衆の自主的要求を自分のものとして受け止めることができず、したがって、集団の自主性をめざすたたかいに合流することができないであろう。社会の変革の合法則性を認識できず、その戦略戦術がどのようなものであるかも知らないと、組織と集団への責務を果たせないばかりか、自主性をめざす社会的集団にとって重荷となるだけである。

人間はたゆみのない修養と実践を通して、自主性と創造性、意識性を高めていくとき、真の人間として生きていくことができ、「わたしは人間である」と堂々と答えることができるのでる。

13　世界の支配者･改造者

昔から世間には、運勢を占ったり、神仏に願を懸け、または巫女を呼んで厄払いをするような人が少なくない。

その根底には、何か未知な力に頼って生きようとする誤った観念があり、現世の苦痛から逃れる道がどこにあるかわからない人たちが、そこに救いを求めているのである。

世界には、人間以外に世界を支配する存在がない。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在である人間は、つまり世界唯一の支配者であり改造者であります」

人間は世界唯一の支配者・改造者であり、世界は人間の支配と改造の対象である。世界が人間によって支配され、改造されるということ、これが、人間との関係で新たに解明された、世界にたいするチュチェ思想の観点である。

世界にたいする以上のような観点によって、神や天が世界と人間の運命を支配するという観念論的見解や、超人の意志によって歴史と人間の運命が決定されるという主意主義などの非科学性が決定的に論証された。また、人間は数知れない物質的存在の一部であり、客観的物質世界の発展、とくに、社会経済発展の合法則性によって、人間の運命が決定されるという、世界にたいする唯物論的見解の限界性も克服された。

世界には、千差万別の事物現象がある。しかし、人間の運命の開拓に奉仕する世界観の見地からするとき、この無数の事物現象も

大きく分けて、人間と人間を取り巻く世界から成り立っていると見ることができる。意識は人間に体現された一つの属性であって、なんらかの独立した実体ではない。意識を持つ人間が、現実の世界で自己の運命を開くために活動するのである。

このことは、第 1 に、人間が自主性を持つ社会的存在であるため、世界を宿命的にではなく、革命的に対応するという意味である。

自然の事物現象には、自己の存在を示すなんらの意識的要求も、その目的を実現するための主動的な活動もない。人間以外のすべての事物現象には、互いに依存し、制約する作用があるだけである。

しかし、人間は自主的な活動を通して、自主性を束縛する自然を自分に奉仕させ、社会的関係も自分に有利に変革していくのである。

世界には人間を従属させ、支配する何物も存在しない。

ここにつぎのような話がある。

朝鮮の愛国烈士安重根（アンジュングン）を死刑に処した旅順監獄の日本人所長栗原の娘が、安重根の位牌を部屋に 31 年間も祭ったというのである。安重根の死後、栗原の家運が見る見るうちに傾いたのであった。彼女の姉が急病にかかって 30 分もたたずに息を引きとり、母親は夜中に寝床の中で原因もわからずに死に、長男は発狂し、次男は肺病をやみ、華族に嫁いだ娘は冷遇された末、婚家を追われるといった始末であった。そこで、彼女は厄払いとして安重根の霊を慰めることを思いたったというのである。

しかし、栗原家の災いは安重根の怨霊によるものではなく、朝鮮民族を収奪し、虐殺する日本の暴政に荷担した栗原の一家が、自分たちの罪業に恐れおののいて、家庭の相つぐ不幸を安重根のたた

りと思いこんだにすぎないのである。

それは第 2 に、人間が創造性を持つ社会的存在であるため、世界にたいして受動的にではなく能動的に対応し、つねに自己の要求に合わせて改造していくという仕方で、世界の事物に働きかけるという意味である。これは人間に特有な生存方式である。

自然には、客観的に存在する物質相互間の盲目的かつ自然成長的な作用があるだけで、目的意識的に他の事物を改造する存在はない。

ツバメやカモのような渡り鳥は季節が変わるたびに、はるばると海上幾万里を飛翔し、ねぐらを移すことによって生存を保つように、環境に順応するのが生物一般の人間と異なる生存方式である。したがって、目的意識的に環境を変えてゆく人間と、環境に順応して生きる他の事物との関係は、人間が世界を支配し、改造する関係にならざるをえないのである。

世界には人間のほかに、事物を改造する存在はない。

それは第 3 に、人間が意識性を持つ社会的存在であるため、世界を盲目的にではなく、目的意識的に改造するという意味である。

自然には、自分の活動をコントロールする意識を持つ存在がなく、したがってそこには意識的な活動もありえない。意識的な存在である人間と無意識的な存在である世界との関係においては、必然的に人間がそれを支配し、改造する関係とならざるをえないのである。

要するに、人間と世界との関係は、自主的な存在と宿命的な存在、創造的な存在と受動的な存在、意識的な存在と盲目的な存在との間の関係であり、したがって、人間による世界の支配と改造は、まさに人間の本質的特性によって規定された関係だと言ってよいのである。

人間が世界の唯一の支配者であるという見解にかんして、一言強調しておきたいことがある。それは、人間が世界の唯一の支配者であるということが、決して世界が人間を中心にして成り立っているという意味ではないということである。世界は空間的に無限であり、時間的に永遠である。したがって世界には、時空的にいかなる中心もありえない。自然科学の研究では便宜上、時空の中心を設定する場合があるが、哲学ではそのようなことがない。

人間を本位にして明らかにされた世界にたいする見解は、人間を世界の中心に据えたり、客観的対象の存在を否定したりする観念論的な見解とはなんのかかわりもないばかりか、それとは根本的に対立する見解である。それは物質世界の客観的存在とその合法則的な運動発展を前提として、人間と世界との関係を明らかにした見解なのである。

世界には、千差万別の事象が錯綜してかかわりあっているが、それは偶然による混沌状態ではない。個別的かつ偶然的なかかわりあいのなかに、必然的かつ普遍的なものがあるのであり、物質世界は一定の客観的法則に従って運動発展するのである。世界が客観的な法則に従って運動発展するため、人間はその法則を認識し、利用して、自己の要求に合わせて世界を改造し、支配していくのである。

世界が人間によって支配され、改造されるのは、実践によって確認された絶対的な真理である。

人間の生存を脅かしていた自然の破壊力は、人間の労働と知恵によって、人間に奉仕する力となり、人間の手が届かない自然そのままの天然資源は、加速度的に探査、採取され、消費財や生産の手段に変えられている。人間はまた、自然にそのままでは存在しない

機械設備を作り出して自然を改造し、地上ばかりか空や海をも支配してゆく。

社会も人間によって支配される。それは、人びとの民族的および階級的自覚が比類なく高まり、自主性を蹂躙していた社会的関係が、人間の自主性を守る社会的関係へと変わっていることによって確認されている。自然も社会も、人間によって改造され、支配されており、その支配圏は時の流れとともに加速度的に伸び広がっている。

このように、人間を本位とする世界についてのチュチェ思想的見解は、世界を、人間を制約する物質的環境とのみ見なしていた従来の哲学的見解の限界性と一面性を克服して、世界が人間によって支配され、改造される対象であることを明らかにし、人間の運命開拓の正しい道をさし示したのである。

14　世界の支配と改造発展の合法則性

人間が世界で唯一の支配者･改造者であるとすると、人間による世界の支配と改造発展の普遍的な合法則性とはどのようなものであるかが、自己の運命を開くたたかいに取り組んでいる人たちにとって関心事とならざるをえない。

人間による世界の支配と改造発展の合法則性で主要なことは、第１に、世界はただ人間の能動的かつ積極的な活動によってのみ、人間のための世界に作り変えられるということである。

人間を取り巻く環境は、人間にとって有利な場合もあれば、不利な場合もある。不利な環境は、人間の能動的かつ積極的な改造活動によ

ってのみ有利な環境に変わる。辛抱強く待っていれば環境が有利に変わるかも知れないと期待するのは、環境におとなしく従う奴隷根生である。他方、有利な環境にあっても、それがおのずと人間に有利に作用するのではない。ただ人間の積極的な創造的活動によってのみ、有利な環境は活用され、不利な環境は有利な環境に改造されていくのである。こうした意味で、楊士彦（ヤン サ オン）の詩を味わって見よう。

泰山は高しといえども天の下の山
登り登れば登りつくものを
人はただ仰ぎ見るばかり

詩は、目的意識的なたゆまぬ努力と、困難克服の意志によってのみ、人間の希望はかなえられるということを強調している。

自然は人間の生活の物質的源泉であるが、他方では、人間の自主性を束縛する要因でもある。社会も人間の生活にとって不可欠の存在であるが、つねに人間に恵みを与えるのではなく、人間の自主性を束縛する根本的要因として作用する場合もある。したがって、人間は自然を能動的に征服し、人間の自主性を拘束する古い社会的関係を変革するためのたたかいを展開するのである。尻込みしたり傍観したりすることなく、革命運動の主人としての自覚と強い意志をもって、創造的積極性を最大限に発揮するとき、新しい社会への道が開かれるということは、すでに実証された真理である。

第 2 に、人間による世界の支配と改造発展の合法則性は、人間の自主性を実現する方向で、世界の改造発展がなされるということである。

自然には低い段階から高い段階へ、単純なものから複雑なものへ、低次なものから高次なものへと変化発展する物質運動の方向性がある。しかし、物質の運動のこの方向性は、自然成長的な運動過程としての方向性である。

このような自然成長的な運動の過程に、人間がこれに働きかけるとき、その作用によって運動発展の方向性が付与されるのである。

人間のあらゆる活動は、世界の主人として生きるための自主的な要求から出発する。自主性は人間の活動の源泉であり、同時にその目的となる。人間は自主性の実現を活動の目的に定め、創造的能力を最大限に発揮して、すべての困難を乗り越えながら、自然と社会をその自主的な要求に合わせて改造、変革し、自分に奉仕させていくのである。

現在の家畜は、1 万年ほど前から野生動物を馴らしてできたものだと言われている。ニワトリは、およそ 5 千年前に、インドのバンキーバという鳥を馴らしたものだという。人間は石灰石や石油のような無機化合物を分解、化合して、ビナロン、ナイロンのような、自然にはないものを作り出してその自主的な要求をみたし、自然に存在するエネルギーを、異なった形態のエネルギーに変えて利用しもする。

生産力の久しい発展や社会体制の発展、科学技術の発達などの歴史は、世界の改造発展が人間の自主性を完全かつ全面的に実現する方向へと進められていることを実証している。

第 3 に、人間による世界の支配と改造発展の合法則性は、人間によって支配され、改造される領域が無限に広がっているということである。人間は近い地域から次第に遠い地域へと、近海から遠海

へと、地面から地下深くへと、地上から空中へと世界の支配領域を広げてきた。そして今では、大気圏と引力圏の外へ飛び出して、宇宙空間に支配と改造の領域を広げ、180 億光年も先の銀河系を研究対象とする段階に至っているかと思うと、他方では、可視世界から微視世界へとその支配と改造の領域を広げ、今日では、百余種の素粒子を発見しているのである。

もちろん、歴史の一定の発展段階における支配と改造の領域は、相対的に制限されている。しかし、それは人間の認識と実践能力の歴史的限界性にもとづくものである。人間の自主性と創造性、意識性は人類の無限な発展過程で、果てしなく伸びていくであろうから、人間によって支配、改造されない世界の領域は存在しないであろう。

人間による世界の支配と改造発展の合法則性は、人間の自主性をめざす民族と人民大衆の自主偉業が必ず達成されるという確信と、そして、たたかいのなかで生じる困難は一時的なものであり、積極的なたたかいによって必ず克服でき、また克服しなければならないという不屈の意志を人びとに固めさせてくれるのである。

15　愛と信頼の哲学的原理

あらゆる他の科学と同様、哲学もその固有な根本原理にもとづいて展開され、体系化される。

チュチェ哲学は、人間の本質的な特性を明らかにし、人間が世界の唯一の支配者・改造者であることを解明して、世界で人間が占める地位と役割の問題に解答を与える哲学的原理を定立した。チュ

チェ哲学が明らかにした哲学的原理は、「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する」ということである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「チュチェ思想の哲学的原理は、世界における人間の地位と役割を解明した人間本位の哲学的原理であります」

人間があらゆるものの主人であるということは、世界で人間が占める地位を示したものであり、人間がすべてを決定するということは、世界で人間が果たす役割を示したものである。

人間を本位とする哲学的原理は、人間への愛と信頼にもとづく哲学的原理である。

それは、第１に、人間の運命の開拓を哲学の根本的使命として、それに答える原理だということである。

どのような原理が哲学の根本原理として展開されるかということは、その哲学の使命にじかに関係する。哲学は人間の運命開拓の道を示してこそ、哲学の本来の使命にかなった根本原理を定立することができるのである。

搾取階級の哲学は、人民にたいする支配の合理化に役立つよう、その原理を設定している。すべての搾取階級の哲学は、人間以外のある神秘な精神的存在によって人間の運命が定まるとする神秘主義や、ある絶対者の分身である超人の意志によって人間の運命が定まるとする主意説、それにある先験的な心理的要因によって人間の運命が定まるとするなど、さまざまな観念論によって、人民の支配を哲学的に合理化し、人民の自主意識を麻痺させてきた。

マルクス・レーニン主義哲学は、社会の物質的諸関係が歴史と人間の運命を決定し、物質が意識を規定するという原理を明らかにし

た。そこでは労働者階級の経済的解放を自己の使命とし、経済的解放が直ちに人間の解放につながるとされている。このように、マルクス･レーニン主義哲学は、生産様式の決定論と物質が意識を規定するという原理を根本原理として展開され、体系化された。

チュチェ哲学は、人間が世界の主人、自己の運命の主人であり、世界で唯一の改造者である人間の運命を開く力も人間自身にあるということを解明して、歴史上はじめて、人間の運命開拓の原理を明らかにした。

チュチェ思想の哲学的原理の最大の強みは、人間を歴史と自己の運命の主人として重視し、あらゆるものを人間に従わせ、人間自らの力によってのみ自然と社会を改造し、変革して、自己の自主性を実現していけるという、人間愛・人間尊重・人間信頼の原理を定立したことにある。

チュチェ哲学が万人の心を引きつけるのは、この人間愛・人間尊重・人間信頼の精神が哲学的原理に整然として定式化され、そこからチュチェ哲学が展開され、体系化されたことにあるのではなかろうか。

一般的に人びとは、哲学的原理といえば難解なもので、それは哲学者の領域に属する問題だと思ってきた。しかし、誰にもたやすく理解でき、日々の生活のなかでしばしば体験する平凡かつ普遍的なことが、チュチェ思想の哲学的原理だと知って、人びとは深く感動し、生活と活動の前途がはっきり展望できるようになったと言っている。

人間の運命開拓の原理を、哲学の根本原理として定式化したことに、チュチェ思想の哲学的原理が愛と信頼の哲学的原理になりえ

た根拠があると言えよう。

第 2 に、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという原理が、愛と信頼の哲学的原理となるのは、人間の根本的な利害関係を踏まえて、世界で人間が占める地位と役割を明らかにしたことにある。

人間は、自己の利害関係をもとにしてあらゆる事物現象を認識し、自己の利害関係に合わせてそれを改造し、利用していく。事物現象の意味や価値、用途などの用語自体が、人間の利害関係を前提とし、規準としているのである。したがって、世界にたいする人間の価値判断は、客観主義の立場からではなく、社会的存在である人間の根本的利害関係にもとづいて、主体的に決定しなければならない。

チュチェ哲学の原理は、世界と自己の運命の主人として生きようとする社会的人間の根本的利害関係を踏まえて、世界で人間が主人としての地位を占め、世界の改造変革で決定的な役割を果たすということを哲学的原理として定式化した点で、それが人間への愛と信頼の哲学となりえたのである。

第 3 に、人間はあらゆるものの主人であり、すべてを決定するというチュチェ哲学の原理が、人間の活動を基本にして、世界で人間が占める地位と役割を明らかにした原理であるということからして、愛と信頼の哲学的原理となりえたのである。

人間と世界との相互作用で能動的かつ決定的な役割を果たすのは人間であり、世界は人間にたいして受動的かつ盲目的に作用するだけである。世界は人間の能動的で目的意識的な作用によって、人間のための世界に作り変えられてゆき、人間は世界の改造者・支配

者となるのである。

チュチェ哲学の原理は、人間の活動を基本にして世界の変化発展を考察し、世界を改造し、支配していく人間の活動の原理を哲学的原理として定式化したものであるが、まさにこのことによって、人間にたいする愛と信頼の哲学となりえたのである。

また、人間を世界の主人、天のような存在として押し立て、人間の自主性を実現するために、人間自身の力で世界を改造し、自らの運命を開いていくべきだとする原理を定式化することによって、チュチェ哲学の原理は愛と信頼の哲学的原理となったのである。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「チュチェ思想が社会的人間にたいする科学的解明にもとづき、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を明らかにしたことは、世界観に新たな変革をもたらした哲学的発見であります」

人間の運命問題にいかなる解答を与えたかという見地から思想史を総括してみると、これまでの思想史は総体的に、運命を規定する要因を人間の外に求めた思想史であったと言える。

このような意味から、チュチェ思想の哲学的原理は、人間の外で人間の運命を決定する要因を求めていた従来の思想にとどめをさし、それを人間自らに求め、人間を世界の支配者・改造者と見る「以民為天」思想に原点を求めることによって、哲学思想史における方向転換を果たしたのであった。

つぎに、世界観の根本原理の見地から思想史を総括してみると、従来のあらゆる思想は人間の運命問題に解答を与える原理からではなく、世界の始源問題にかんするあれこれの原理を踏まえて、自ら

の思想を展開してきた。
　ところが、チュチェ思想の哲学的原理は、物質と意識の関係問題が哲学の根本問題として展開されてきた従来の思想史にピリオドを打ち、世界と人間の関係問題、つまり人間が主人の地位を占め、世界の改造で人間が決定的な役割を果たすということを明らかにし、この原理にもとづいて自らの思想を展開することによって、思想史に新紀元を開いたのである。
　つぎに、思想史における転換の性格という見地から考察すると、マルクス･レーニン主義は哲学的原理の根本的な作り変えと、哲学本来の使命に合った哲学的原理の発見にもとづいて展開されたのではなく、物質と意識の関係問題にかんする原理の枠の中で達成された一つの転換であった。
　しかし、チュチェ思想の哲学的原理は、世界観の本質と使命に合った本来の意味での哲学的原理、つまり、世界における人間の地位と役割の問題および人間の運命開拓の問題をその原理としてこれに科学的な解答を与えたもので、哲学史におけるまったく新しい発見であった。
　こうした意味で、チュチェ思想の哲学的原理の発見は、思想の根本的枠組みの変革であって、思想史における変革だと言える。ほかならぬこの点に、人類の思想史および人類の解放偉業における、金日成主席と金正日総書記の不滅の功績があるのである。
　世界には、歴史と自己の運命の主人としての地位にまさる地位はなく、歴史の発展と自己の運命の開拓で果たす役割以上に大きな役割はない。
　このように、人間を本位とする哲学的原理は、世界を改造し、

歴史を発展させるうえで、人民の力に代わるいかなる力もこの世にはなく、人民自身の力が歴史と自己の運命を開く絶対的な力であるということを論証している。

このように、人間本位のこの哲学的原理は、あらゆる搾取と抑圧を論理的に否定し、人間の尊厳と価値を最高に絶対化することによって、人民大衆に無限のエネルギーを与え、かれらを民族の解放と階級の解放、ひいては人間の解放が達成された「以民為天」の社会へと力強く励まし、導く原理である。

16　最高のレベルに達した人間の尊厳と価値

人間を本位とするチュチェ哲学によって、人間の尊厳と価値は歴史上最高のレベルに到達した。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「チュチェ哲学は人間の本性と世界の支配者、改造者としてのその地位と役割を新たに解明することにより、人間の尊厳と価値をもっとも高い位置におし上げました。これはいかなる哲学思想も達成できなかったチュチェ哲学の大きな功績であります」

昔は天が世界のすべての変化を支配する絶対的な存在とみなされていた。それで、皇帝や王は自らを天子と称して、自分の意思が天の意思であり、それに逆らうと天罰を免れないとして、民衆を威嚇し、支配した。

しかし、人間を本位とするチュチェ哲学は、人間が世界の支配者・改造者であるとして、人民こそ世界を支配する絶対的存在であ

り、すべてのものが人民の自主性の実現に従わされるという真理を明らかにした。このような意味で、人間を本位とするチュチェ哲学は、「以民為天」の哲学だとされるのである。

人間を本位とするチュチェ哲学は、世界で人間がもっとも貴重な存在であると宣言した。

これまでも、世界で一番貴重なものが、カネではなく人間であるということはよく言われもし、哲学者や政治家の間でもしばしば口にされてきた。しかし、それは一つの空論にすぎない。

社会的存在である人間の本性と、世界の支配者・改造者としての地位と役割が解明されていない状況のもとでは、それが世界観としてはもとより、政治理論的にも宙に浮き、現実的なものになれないのである。

もちろん、このことは人間だけが価値を持つということではない。人間以外の事物も価値を持っている。しかし、それらはあくまでも、人間との関係においてのみ価値を持ちうるのである。人間との関係を離れて、事物の有用性や貴重性は考えられるものではない。

自主性と創造性、意識性を持つ人間が出現し、世界を人間に奉仕させるための人間の創造的活動が進められる場合にだけ、世界の事物は価値を持つのである。このことは、世界の事物現象が人間の福利に役立つ限りにおいてのみ、価値を持つということを意味する。

こうした意味で、事物の本質的な特性にたいする認識は、価値評価の前提となる。価値評価の対象は人間の要求とかかわりなく客観的に存在する事物である。事物はそれ自体が持つ特性により、人間に有益な場合もあれば、そうでない場合もある。

人間は価値評価の主体でありながら、同時に対象でもある。と

りわけ自主性と創造性、意識性の高い人であればあるほど、社会的により貴重な存在だとされ、また、社会と集団、民族と人民大衆のために、自分の創造的知恵を傾けて大きな功績をあげた人であればあるほど、より貴重な存在だとされるのである。

さまざまな物質的手段や文化的手段はもとより、天然資源も価値を持っている。

人間の生活手段の源泉は自然のなかにある。人間に役立つ天然資源や社会の富はなによりも貴重である。

しかし、人間以外の天然資源が人間より貴重なはずがなく、人間以上に価値の大きな物になることはありえない。天然資源や社会の富は、人間の生存と発展に奉仕する手段にほかならない。もともと社会の富は人間自身が作り出したものである。

世界に存在するすべてのものは、人間のための手段となりえても、人間は他のいかなる存在のための手段にもならず、つねにそれらを自己の自主性の実現に役立たせるのである。

人間は、いかなるものにも従属せず、他人のための手段になってもならない唯一の存在である。それゆえ、人間はこの世界でもっとも尊厳ある貴重な存在となるのである。

しかし、現実に生きる人間がみな、人間の尊厳と価値を備えているのではなく、人間らしく生きる人間だけが、人間の尊厳と価値を備えているのである。

人間がその本性である自主性と創造性、意識性を失えば、決して人間らしく生きているとは言えない。

階級社会は、人間の自主性を束縛するくびきである。

古代社会の奴隷はものを言う道具であった。かれらは他の品物

と同じように売買の対象であった。古代ローマのデロス島では、1日に1万の奴隷が売買された日もあったという。古代エジプトでは、奴隷女1人が270グラムの銀で売買され、またある国では、奴隷主に逆らった奴隷は、刑罰として耳と舌を切り取られ、八つ裂きにされたという。

奴隷は奴隷主が死ぬと殉葬されもした。

古代ギリシアの哲学者プラトンは、神に捧げた三つの感謝のうちの一つを、「自分を奴隷におつくりにならなかった」ことだとしたそうである。

古代奴隷所有者の理念的代弁者であったアリストテレスは、肉体労働に従事する奴隷は徳化が不可能であるとして、かれらを人間として扱わなかった。ところが、われわれは、奴隷が肉体労働をするために非人間的な存在となったのではなく、社会的存在でありながらも社会から疎外されたために、人間らしく生きることができなかった、と言うべきであろう。

自主性を失い、社会から疎外され、道具化された人間は、いついかなる場合にも、人間の本性に即して生きる真の人間だとは言えない。

人間がその本性に合った人間になりたいと思えば、正義の支配する社会を作らなければならない。しかし、そのような社会はひとりでに実現するのではない。ひとえに人民大衆自身が不屈の意志を持って、たゆみないたたかいをくりひろげてのみ、それは実現するのである。

人間の尊厳を蹂躙する現実に諦めをもって対応し、人間を非人間化する現実に黙々と従う人間は、人間らしい人間とは言えない。

しかし、不条理かつ不平等な現実に妥協することなく、そのような社会の反人民的な秩序に決然と挑み、人間のための社会を作るためにたたかう人びとは、かれらがたとえ不正義の社会で生きていようとも、人間の本性を体現した真の人間と言えるのである。

17　爆破された原鉄炉

チュチェ哲学は、世界で人間が占める地位と役割にもとづいて、世界にたいする観点を新たに解明した。

一般的に、哲学は世界観を与える学問である。世界観は世界にたいする見解だけでなく、世界を認識、改造し、自己の運命を開いていく活動で堅持すべき、普遍的な指針および活動原則を示す。

それでは、チュチェ哲学が明らかにした世界にたいする観点とは、どのようなものだろうか。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「チュチェ思想によって明らかにされた世界にたいする観点と立場は、世界の主人である人間を中心に世界に対応する観点と立場であります」　（『チュチェ思想について』日本語版 13 ページ）

世界にたいするチュチェ思想の観点は、一言でいって、人間を中心にして世界に対応する観点である。

チュチェ哲学は、人間を哲学的考察の中心に据えて、人間の運命問題に解答を与えることを根本的な使命とする、人間本位の哲学であることから、人間が世界の支配者･改造者であり、世界は人間の支配および改造の対象であるという、世界にたいする独創的な見

解を示し、人間を中心に世界に対応する観点を明らかにすることができたのである。

人間を中心に世界に対応する観点は、第 1 に、人間の利益から出発して世界に対応することである。人間が世界の主人であるため、すべてのものをその主人である人間の利益に奉仕させ、人間に役立たせる見地に立って対応することは、もっとも正しい観点だと言える。

第 2 に、世界にたいするチュチェ思想の観点は、世界の改造者である人間の活動を基本にして世界に対応する観点である。

世界の改造を望むのは人間であり、人間の積極的な活動によってのみ、世界は人間のための世界として作り変えられていくのである。したがって、自主的な要求に即して、目的意識的に世界を改造していく人間の主動的な活動の見地から世界に対応するのは、世界にたいするもっとも正しい観点である。

金日成主席はつぎのように述べている。

「すべてを人間を中心に考え、人間に奉仕させるのは、世界を認識し改造するうえで堅持すべきもっとも一般的な方法論です」

人間を中心にして世界に対応する観点、即ち、人間の利益から出発してすべてを考察し、それを人間の自主性の実現に従わせるとともに、人間の役割を高めてすべての問題を解決するという観点は、自己の運命を開いていくための人間の活動で堅持すべき、もっとも普遍的な哲学的方法論である。

ある人は、哲学は一切れのパンさえ焼くことができないという。しかし、これは世界観の方法論的役割を知らないための、あるいは哲学自体の必要性を拒むための発言だと言ってよい。もちろん、哲

学そのものがパンや飯をくれるものではなく、また具体的な物質的富を生み出す知識を与えてくれるものでもない。しかし、哲学はそれ以上のもの、世界のあらゆる知識をたんに合わせただけでは決して与えることのできないもの、つまり、人間の運命開拓の方法論としての羅針盤、あるいはともしびを与えてくれるのである。

それでは、哲学的方法論がどのようなものであるから、「アリアドネの糸」のような役割を果たすのであろうか。

自然と社会を改造し、自己の運命を開いていくための人間の活動過程は、一定の目的を立て、それを達成するための手段を整え、効果的に利用しながら、さまざまな困難を克服していく過程だと言える。したがって方法論とは、活動の目的をどのように定め、いかなる手段を整えて、それをどう効果的に利用するかということ、即ち目的と手段、方法をどのように設定するかということを明らかにする理論である。

ところで、方法論を立てるうえで、チュチェ思想的な観点に立てば、人間の活動の目的をもっとも正しく定めることができる。このことから、世界にたいするチュチェ思想的観点は、もっとも正しい哲学的方法論だと言える。

一般的に、目的を立て、その実現に取り組むのは、人間の活動の根本的な特性である。人間は行動に先立ち、結果を予想して目的を立てる。

活動の目的がどう立てられるかによって、認識と改造、変革の対象が定まり、ひいては、対象のどの側面を、どのような規模と深さをもって改造し、変革していくかという問題が決まるのである。

目的をどう立てるかによって、第 1 に、活動の根本的な方向が

決まる。目的がどう設定されるかによって、それは人間の運命の開拓および歴史の発展を前向きに進めもすれば、前進を妨げる反動的なものにもなるのである。言いかえれば、人間の自主的な要求と利害関係を活動の基本的な目的として明確に定めれば、人間の運命を正しく開き、歴史を前進させることができ、逆に人間の自主性を抑圧し、蹂躙することを目的とすれば、それは歴史の前進を阻む反動的なものとなる。

ここに、「爆破された原鉄炉」についての話がある。

1945 年 8 月 15 日に朝鮮が日本帝国主義の支配から解放された直後のことである。朝鮮北方の都市金策（キムチェク）市に、日本人が経営していた高周波製鋼工場があった。工場には高さ 2 メートル、長さ 10 メートルの原鉄炉が何基かあった。絶縁装置の不備なこの炉で 3，300 ボルトという高電圧のもとで銑鉄が溶かされていた。高圧電流の漏電によって、労働者はしばしば生命を失った。雨の日などは、地下の高圧線からレールに電流が漏れて、労働者をいっそう脅かした。しかし、ほかに生活の手立てがないかれらは、この恐ろしい職場を捨てることができなかった。

ここで働いていた人たちの話によると、毎日多くの労働者が命を落とし、1 日に 38 名もの死人が出たこともあったという。それでも、会社側はいっさい安全対策を立てずに労働者を酷使し、前もってかれらの「死亡通知書」を作っておいたという。これは、利潤のみを追い求め、労働者の生命などは虫けらほどにも思わない、非人間的な日本帝国主義の植民地政策の所産であった。

解放後、このような実状を知った金日成主席は、新しい国づくりに鋼鉄がいくら必要であっても、労働者の貴重な生命と取り換え

ることはできないし、そんなふうにして生産した鋼鉄は必要がないとして、原鉄炉の爆破を命じた。鋼鉄の生産も、新しい国づくりも国の主人となった労働者のためのことである、労働者の生命を奪うような原鉄炉は、それが解放朝鮮の経済にとっていかに大きな財産であっても必要としない、としたのである。

　このことからも、社会的人間の自主的な利益を踏まえる観点と、特権層の利益にもとづく観点が、人びとの活動の方向をどれほど異なったものにするかということをはっきりと知ることができるであろう。

　ある人たちは、自然科学が一部の人のためのものではなく、全人類のためのものだと言う。確かに、ピタゴラスの定理やニュートンの法則に、特定の社会的集団の要求や利害関係がこもっているのではない。しかし、それを利用する場合には、一定の社会的集団の要求と利害関係が作用するのである。例えば、核エネルギーそのものに特定の社会的集団の要求や利害関係がこもっているのではない。ところが、人間の自主的な生のための物質的手段や生活条件の改善に、それがまず利用されたのではなく、核兵器として、人間の大量殺戮に利用されたのであった。

　目的をどう立てるかによって、第 2 に、目的の実現に向けた人間の活動が現実的なものにもなれば、非現実的な空想として実現不可能なものにもなるのである。

　トマス・モーアの『ユートピア』やカンパネラの『太陽の都』に描かれた共産主義的ユートピア、フーリェの『ファランジュ（空想村）』などは、なんらの財産もなく、口を糊するためにさすらう人びとを憐れんで、かれらが望む社会の実現を頭の中で描いたもの

にすぎない。それらは、現実の社会的階級関係とは無関係に人びとの自主性を確立しようと試みた、むなしい空想であった。だから、それは人民の運命を開いていくためのたたかいで、活動の指針にはなれなかったのである。

ある国では、社会主義体制の確立後、社会の主体である人民大衆の思想的準備程度と社会的・経済的条件についての十分な検討もなしに、一挙に共産主義を建設しようとして、深刻な痛手を蒙った。旧ソ連でゴルバチョフは、資本主義の「物質的繁栄」とブルジョア民主主義への幻想にとりつかれて「人間の顔をした社会主義」の建設を喧伝したが、結局は、社会主義を崩壊させてしまった。

人間の自主的な要求とは、あらゆる従属と束縛から抜け出し、自己の運命の主人として、自由に生きようとする要求であり、利害関係とは、自主性の実現条件とのかかわりのなかで形成される、人間の根本的な利益である。したがって、自主的な要求と利害関係から出発して活動の目的を立てるということは、自主的な要求を踏まえ、その実現条件についての正しい判断をもって、目的を立てるということである。

活動の目的をどう立てるかによって、第 3 に、その活動に主人としての自覚をもって能動的に参加するかどうか、またそのために、自己の創造力を最大限に発揮するかどうかが決まるのである。

もっぱら人間の自主的な要求と利害関係を活動の目的として明確にうち出してこそ、広範な人民大衆が主人としての自覚をもって、目的の実現に積極的に取り組み、自分たちの創造的な知恵と力を最大限に発揮するのである。

18　人間万能と物質万能･兵器万能

世界にたいするチュチェ思想の観点が、人間の運命を開く「アリアドネの糸」、つまり哲学的方法となるのはつぎに、それが目的達成のための手段をもっとも正確に規定しているからである。

目的が正しく設定されたあとの活動の成果は、目的達成手段の設定いかんに大きくかかっている。

人間の運命を開いていくための実践活動には、さまざまな手段が利用される。

物質的･技術的手段は、運命開拓の必須の手段であり、それがすぐれていればいるほど、より大きな成果が容易に達成されるのである。

しかし、物質的･技術的手段は、本質において手の延長である。機械･設備の発達水準は、人間の創造的能力の発達水準が発現されたものであり、それは人間と結びついてはじめて世界の変革の手段としての機能を発揮し､人間がそれを何にどう利用するかによって､その価値と効果が決まるのである。したがって、物質的･技術的手段は、人間の運命開拓の具体的手段ではなく、またその原動力でもない。

運命開拓の当事者は人間であり、目的達成の手段を求め、設計し、製作し、利用するのも人間である。人間の運命を開拓し、世界を改造し､変革する創造的な能力を持つ唯一の存在は､人間である。

自然改造の基本的な手段は人間の創造的能力にあるが、社会の改革で発揮される人間の創造的能力は、意識化され、組織化された

人間の団結力である。

何を基本的な手段とするかは、活動の目的によって異なる。

社会的人間の自主性の実現を目的とするときは、必然的に人間の創造的能力が基本的な手段となるが、そうでない場合は、物質的・技術的手段が基本的な手段となる。

物質的・技術的手段を唯一の手段としてすべての問題を解決しようとするのは、カネがすべてを支配する黄金万能の社会における方法論である。

今日、資本主義社会で、ドルは巨大な力を持つ万能の怪物＝帝王として横行している。ドルさえあれば、大統領にもなれ、博士号も手に入れることができるのである。

アメリカ合衆国に二つの政府があると言えば、首をかしげるむきがあるかも知れないが、それは本当である。

公的な政府はもちろん行政府であるが、その上に陰の政府が君臨しているのである。この政府はドル王＝金融独占財閥からなる「政府」である。『ワシントン・ポスト』紙は「アメリカの社会における帝王はドルだ」と慨嘆している。

人間の人格まで交換価値化した資本主義社会では、人びとは蓄財に血眼となり、黄金が名誉と権力、道徳と良心の代名詞となっている。それで、資本が世間に出まわりはじめたばかりのとき、シェークスピアは、こう告発した。

黄金よ！　きらびやかな黄金よ！
これさえあれば、　黒も白に
醜いものも美しく

不正も正義に
卑しいものも貴く
赤も黒に
卑怯者も勇敢に
することができるのだ
泥棒も元老の座につかせて
称号と跪拝と名誉をくれる

「黄金万能主義」や「物質万能主義」は搾取階級の蓄財の主要な手段であり、方法論である。

今日、欧米諸国では、「機械万能」や「技術万能」が叫ばれているが、それは「物質万能」「黄金万能」の一変種であって、世界の改造と人間の運命開拓の主体である人間の創造的能力を無視あるいは否定しながら、「物質的繁栄」を謳歌している特権階層が、かれらの貪欲な利潤追求を隠蔽するための隠れみのにすぎないのである。

「機械万能」「技術万能」は「兵器万能」へと突き進んでいる。「兵器万能」は、世界の制覇をめざす帝国主義者･支配主義者の覇権主義的競争の主要な手段となっている。

一方、人間本位のチュチェ哲学的方法論は、反動的な「黄金万能」や「物質万能」「機械万能」「技術万能」を全面的に否定し、「人間万能」を主張している。

科学技術を発達させて利用するのは人間であり、機械や兵器を作るのも人間である。また、その利用法も人間によって決定される。人民の創造的能力と力を信頼し、それに依拠すれば不可能なことがなく、すべてがそこから生まれるというのが、チュチェ哲学的方法

論の原則である。

したがって、人民の創造的な能力と力を育むことは、人間の運命開拓における基本的な要請となる。自然と社会を改造、変革し、人間の運命を開くたたかいでは、機械や経済的条件を見る前に人間を見、また革命情勢の成熟いかんを見る前にも人間を見なければならない。

人間を先に見るということは、かれらの自主的な要求の内容とレベルを見、同時にかれらの創造的能力、なかんずく革命を遂行するに足る創造力と意識化・組織化水準を先に見るということである。

世界を改造し、変革するためには、その第一歩として、人間を有力な存在に鍛え上げなければならない。

情勢が成熟するまで待っていたり、物質的・技術的手段が手に入るまで座り込んでいたりすることは、自己の運命開拓の担当者、主人となることを放棄することである。われわれは能動的かつ積極的な活動によって、不利な情勢を有利に作り変え、また必要な物質的・技術的手段を作り出さなければならない。人民が団結すれば、いかなるファッショ独裁も打倒できるということは、ベトナムのチウ、カンボジアのロンノル、イランのパーレビ、ニカラグアのソモサ、フィリピンのマルコスの運命が実証しており、南朝鮮における1960年の4・19人民蜂起、1964年の6月人民抗争、1980年の光州人民抗争などが示した通りである。

チュチェの哲学的方法論は、人間は万能であり、人民が一致団結すれば、それは自然のいかなる力をも克服し、いかなるファッショ独裁をも打倒して、社会を変革しうる偉大な創造力になるという確信を人びとに抱かせるのである。

19　「チョンリマ」の秘訣

世界にたいするチュチェ思想的観点が人間の運命を開く「アリアドネの糸」＝哲学的方法論となるのは、それが人間の運命開拓上のすべての問題を解決する基本的な方法を教えてくれるからでもある。

人間の運命を開拓するたたかいで、目的が設定されたあとでの活動の成否は、活動の基本的な手段をどう選び、どう活用するかによって決まると言える。

物質的･経済的手段を基本とする観点に立てば、生産力の発展が人間の運命開拓の最適の方法となるであろう。

他方、物質的･経済的刺激が人びとを動かし、経済を発展させる主要な方法であるという主張もある。

物質的･経済的刺激は、人間の基本的な生存権と安定した生活への要求にこたえるもので、人間の活動を促す要因の一つではある。しかし、それが問題解決の主要な方法となるなら、結局、人間の活動は全的に個人の利益と安楽を求めることに向けられ､そうなれば､人間は利己的、個人主義的な存在に堕し、かれらが住む社会は、社会的本性を喪失した人たちの集まりになってしまうであろう。

世界にたいするチュチェ思想的な観点は、目的達成の基本的な手段が人間自身の創造的能力と力にあるとし、人間の知恵と力を最大限に発揮させることに､すべての問題解決の基本的な方法を求める。

金日成主席はつぎのように述べている。

「革命や建設には、これといった妙策があるものではありません。われわれは、なにか僥倖にありつこうとして無駄骨を折るべ

きではなく、歴史の創造者である人民大衆をふるいたたせる政治活動に力をそそがなければなりません」

社会革命に従事する人びとの活動の根本的な目的は、民族と人民大衆の自主性の実現にあり、目的達成の基本的な手段は、大衆自身の創造的な能力と力である。ところで、人間の創造的な能力と力は、思想意識のコントロールのもとに形成され、作用する。したがって社会を変革する活動でまず求められることは、いかなる場合にも大衆を有力な存在に作り上げ、かれらの創造的な能力と力を最大限に発揮させることである。

これは、朝鮮の解放後、新しい社会の建設と社会主義建設のたたかいを通して証明された真理である。

奇跡を信じない者には、奇跡が起こらないという格言がある。

人民の創造力に依拠し、それを最大限に発揮させるとき、勝利は必至であるということが、人間中心のチュチェ哲学的観点に立った「民拠百勝」の思想である。

人民の力を信頼せず、人民の力に依拠しない人間には、革命家としての資格がない。そのような「思想家」や「運動者」は、事大主義や外勢依存思想にとりつかれて、革命運動の高揚期には超革命的に行動しながらも、いったん困難を前にすると、悲観主義、敗北主義に陥って敵に投降し、革命を裏切るのである。

人民の力に依拠すると、奇跡を生むが、人民の力を信じない者には、いかなる奇跡も起こらないのである。

周知のように、朝鮮における戦後の社会主義建設は、筆舌に尽くせぬほど困難ななかで進められた。

米軍の爆撃によって煉瓦 1 枚、セメント 1 グラムもなかった戦

後、しかも、李承晩の「北進」騒動が執拗にくりかえされ、分派・事大主義者の策動も甚だしかった。

　このようなときに、金日成主席は、降仙（カンソン）製鋼所を訪れて、労働者たちに国の情勢と経済状態を説明し、年間計画 8 万トン以外に鋼材 1 万トンをさらに生産すれば、国は腰を伸ばせるとし、わたしはみなさんを信じ、みなさんはわたしを信じて、この苦しい難局を打開してゆこうではないかと訴えた。労働者階級への厚い信頼に感動した降仙の労働者たちは、主席の呼びかけにこたえて、通常能力年間 6 万トンの分塊圧延機をもって、12 万トンの鋼材を生産した。金日成主席は、かれらの偉勲を伝説のなかの千里馬の飛翔にたとえて、全国、全人民を社会主義建設のチョンリマ運動へと奮い立たせたのであった。

　このように、チョンリマ運動は、金日成主席のまわりに結集し、社会の主人としての責務を果たそうとする人民大衆の自主的思想意識の偉大な現れであった。チョンリマ運動は、経済と文化、思想と道徳のあらゆる分野で、立ちおくれた古いものを克服しながら、社会主義建設を最大限におし進めていく全人民的な運動であった。この運動によって、朝鮮では資本主義諸国が 1 世紀から数世紀をかけておこなった工業化の複雑で困難な課題を、14 年という短い期間で遂行する奇跡的な成果をおさめ、世界に「チョンリマの国」として知られるようになったのであった。

　革命発展の新たな高い段階を迎えた朝鮮では今、「3 大革命赤旗獲得運動」が成功裏におし進められている。

　革命と建設では人間が基本であり、思想と政治が基本である。

　革命運動の主人は人民であり、革命運動は人民の自主性を実現

するためのたたかいである。人民の創造的能力と力を育て、かれらの思想を動かす政治が立派におこなわれるならば、革命運動は必ずや勝利するであろう。

このように、世界にたいするチュチェ思想の観点は、「以民為天」即ち人民を世界を支配する天とみなし、「以身為民」即ちすべてを人民の自主性の実現に従わせ、「民拠百勝」即ち人民に依拠して百戦百勝する、もっとも有力な哲学的方法論を示してくれるのである。

20　人間のこだまは天のこだま

「民心は天心」という格言がある。

「以民為天」のチュチェ哲学は、世界を支配する絶対者が超自然的な神ではなく、人民こそが自然と社会、人間自身を改造し発展させていく、世界でもっとも有力な絶対的存在＝「神」であり、人民の心と意思が天心・天意であり、歴史の至上命令であるということ、人間の運命を開いていくためのすべての活動で、人民の要求と意思がその出発点となり、終始それが貫かれなければならない最高の原則であるということ、そして、世界のすべてのものを人民の自主的な要求と利害関係の実現に従わせるのが本道であり、人民自身の創造的な力が、すべてを解決する絶対的な力であるということを明らかにしている。

それでは、21 世紀を迎えた朝鮮人民の民心とはどのようなものであろうか。

まず、南朝鮮人民は植民地的な奴隷としてではなく、誇りある自主的な人民として生きることを望んでいる。

日本帝国主義の支配下で 40 年、さらにアメリカ帝国主義の占領下で 50 余年を生きた南朝鮮人民は、植民地的奴隷生活のつらさが骨身にしみている。

だからこそ、「米軍撤収」「反米自主化」のスローガンは、植民地的奴隷生活と決別しようとする南朝鮮各階層人民の血の絶叫なのである。

南朝鮮人民は、もはやファッショ独裁に甘んじようとはしていない。

民心と民意に逆らうファッショ独裁者の妄動は、歴史の審判を免れなかった。

歴代の南朝鮮統治者の悲惨な末路がそれをよく物語っている。

独裁者李承晩（リスンマン）は国を追われ、朴正煕は腹心によって射殺された。全斗煥（チョンドゥホワン）と盧泰愚（ロテウ）は投獄の恥をさらし、文民独裁者金泳三（キムヨンサム）は、政権末期に、支持率〇パーセントという空前絶後の記録を残した失脚大統領として終わった。

かれら南朝鮮の歴代統治者には、哲学も政治理論もなかった。欧米のあれこれの哲学や政治理論をごちゃまぜにしてこねあげたのが、かれらの哲学であり、政治理論であった。

そのような「哲学」には毫末の真理もなく、そのような政権下では、不正義が幅を利かせるようになる。使命というものが曖昧模糊としているそのような「哲学」はこだまのない叫喚であり、いまわしいことには、多くのまともな人間を狂わせている。

チュチェ哲学にもとづく政治は、自主と統一を成就して全民族

的な自主性を完全に実現しようとする朝鮮人民の自主的な要求と利害関係を正しく反映し、その実現の方法を全面的にさし示している。

アフリカのある人士は、自分がチュチェ思想を理念として受け入れたことについて、こう語っている。

「理念とは、薬の広告でもなければ、手放すのが惜しくて仕立て直して着る中古の輸入服でもない。ましてポケットからポケットへと移り動かされるすり減った銅貨でもない。理念はまた、蓄積された知識の異名でもなければ、何か新奇な知識の断片でもない。知識イコール理念ではないように、学者イコール思想家ではない。

わたしのすべての行動を支え、その指標となるもの、わたしの心の琴線に触れておのずと共鳴せずにはおられないものが真の理念なのだ。わたしの骨身にしみ、大衆の胸を高鳴らせるもの、それが一つの概念としてまとまったものが、わたしの理念となり、われわれの理念となるのだ。それを抱きしめ、必要とあらば、そのために生命をなげうってもかまわないもの、そのような死を誇りとすることができるもの、まさにそのような理念をわたしは信奉している。それはほかならぬ、世に広く受け入れられている自主理念の頂点をなすチュチェ思想である」

世人が公認する時代の理念はとりもなおさず時代のこだまであり、天の声である。フランスのニス大学名誉総長・教授ロベル・シャルマンは、「チュチェ思想は、真の人間の偉業を謳歌する歌のなかの歌、人間の尊厳と価値を謳歌する歌のなかの歌、人類の真の理想と限りない繁栄を謳歌する歌のなかの歌である」と称賛した。

現代の人間のこだまである天の声は、ほかならぬ人間の運命開拓の前途を照らす運命のともしび＝チュチェ思想である。

今、金正日総書記は運命のともしびを高くかかげてわれわれの前途をあかあかと照らしている。それゆえ、朝鮮人民の自主偉業は必ず成就するであろうし、人間が真の人間として生きる「以民為天」の社会への歴史的前進は、自主の軌道に乗って力強く驀進するであろう。

イラン金日成主義研究グループの責任者イリ・レーザ・コジャステの叙事詩をここに紹介して本書のむすびとしたい。

偉大なチュチェ思想万歳

わたしは詩人ではない
こみあげるわたしの思いを
一度として
リズムに乗せたことはなかった

だからわたしは恐れる
あえて詩作のペンを取った今
堅苦しい論理の語句のゆえに
世の詩人の嘲笑を買うのではと
詩壇の法廷に立たされるのではと

それでもわたしは書く
見つからぬあまたの詩語は
空白とし
わが心の叫びを綴ろう

先祖と人類と世界の前に
偉大な哲学に魅せられた
わが魂の雄たけびをあげよう

人間よ　おまえは何者だ

この問いを胸にしてもだえ
人類の歴史は　流れ流れて数千年
哲学の始祖とされる
ターレスからはじまり
いかに多くの哲学者、思想家が
この問いに答えるべく　生涯を捧げたことか

人類史に尋ねよう
この一つの真理を求めて
苦悩の道を歩んだかれらの数が
いかほどであったかと

今に残された
歴史を誇る古代の城址
哲学の地として輝く
かの時代の記念碑

今に伝わる

博物館の色あせた書物は
多くの偉人
あまたの哲人の苦悩の記録

朝に道を聞かば
夕べに死すとも可なりと
真理に飢えさまよった哲人は
いかに多かったことか

しかし一人として
真理を見出せぬままに
問いは歳月とともに流れ続けた

哲学の歴史は
人間が人間を知るための苦悩の歴史

あの名高いソクラテスも
人間よ　おのれ自らを知れと叫んだものの
この問いに答えることなく
ただ「霊魂」なるものを知って逝った

人間の性を論じた
孟子と荀子も
性のよしあしを論ずるにとどまり
この問いには

顔を赤らめた

ひたすら真理を求めたために
師プラトンを痛罵した
情熱家アリストテレスも
この問いに苦しみつつ　世を去った

両手を広げて近寄るアレクサンドロス大王に
陽を遮るなと
傲慢に叫んだディオゲネスも
これには答えられずに　生を終えた

おのれを発見したと
熱っぽく宣言した古代の哲人
かれが喜びにあふれて見た人間とは
「永遠の火」という不可解な存在であった

偶像をののしり
人生を模索した近世の哲人も
ついにその偶像にたぶらかされ
人間を見出せずに逝った

時代の波に乗り
歳月の流れのなかで
騒がれた「主義」と「主張」が

人間をいかに侮辱したことか

一体人間は
愚弄されんがために生まれたのか
いつかは神のしもべとして
またいつかは権力の慰み物として

そして　またいつかは
孤独におののき
生存を競う本能の奴隷として
あまたの哲学者が
数ある思想家が
それなりに苦心し
歴史の上に投げたその問い
人間よ　おまえは何者だ？

人間よ　おまえは世界の主人なのだ！
ついに
チュチェは答えた
幾久しい哲学史のこの問いに
燃え上がった人間理念の絶頂で

渇した人びとの胸に
尽きせぬ泉となり
道に迷った受難者の前に

消えることなき灯台となって
万人の心をとらえたチュチェ

偉大なチュチェは
真理　真理のみを宣言する
人間よ　おまえの本性は
自主性
創造性
意識性

人間よ　おまえは
おのれが運命の主人
この世で
何よりも有力な社会的存在

チュチェのこの宣言で
久しい暗黒の歳月
あまりにも多くだまされつづけた人間が
今やついに
自分自身を発見した

チュチェのこの宣言で
あの声この声に耳を傾け
宿命に身をゆだねた
人間が

奴隷の鎖を解き放った

すべての権利の代弁者
神を崇めた暗黒の時代は過ぎ去った
あらゆるものを失いながらも
おのれの姿を天上に求めた人間が
いまや世界を悟った

恵み深い神の甘い言葉に
魂を預けてきた人間よ
資本の無慈悲なおきてに
縛られてきた人間よ
頭を上げよ、頭を上げるのだ
おまえは世界の主人
おまえは万物の支配者
おまえはまさに世界なのだ

桎梏の数千年
「神」と権力
物の奴隷だった人間を
主人の地位に押し上げたチュチェ

おー　万民が仰ぐ
チュチェのその名は
金日成

金正日
チュチェ―金日成
チュチェ―金正日

人間の根本を照らし
人類の未来を告げる
世界のいたるところ
高らかに響くその名

世々代々譲られてきた遺産のように
人類が授かったその名
全世界がどうして
歓喜にあふれずにいられようか

その名は
数十億の人類が求めてやまなかった
生の理念

その名は
人間愛の絶頂にはためく
永遠な生の旗

その名は
胸のなかにみなぎる
人間の誇りが

一つに凝り固まって
心臓のように大事にされる名

つねに信念を失わず
つねに不屈の意志を持てと
人間の姿勢
人間のありかたを教える
永生不滅のチュチェ思想よ

まことチュチェ思想は
自主時代の聖書
贖罪も懺悔も必要とせず
運命の主人は自分自身であることを
万人に教えた
真の生への唯一の教え

チュチェ思想は　人間を心から愛し
人民を天となせと教えた
人間万歳の春の歌

チュチェ思想は
人間哲学の精華
数千年の桎梏の歴史に
息苦しい暗黒のヴェールを
瞬時にして焼き払った生命の光

その光を注ぐ
偉大な哲学者
偉大な政治家を迎えて
久しい人類の歴史は　軌道に乗せた
混沌の中にさまよった人間の理念を
チュチェ思想を

世界という巨大な王座に
人間を座らせた
偉大なチュチェ思想の真理は
世紀から世紀へと
高く　高く　こだまする

人間よ　おまえは世界の主人だ

意想外の事態が相つぐ
この世紀の頂に
燦然と光り輝く
偉大なチュチェ思想は
吹き荒れる風雨に翻弄される
世界の数十億人民の前途を照らす

自己流の哲学を掲げ
手前みそを並べる

もろもろの政治の渦に巻きこまれ
ついに正気をなくした20世紀の末に
人類は現実に目覚めた
ひとりチュチェ思想のみが
自主の世界を築く力だと

理念の闘争に明け暮れた
波乱万丈のこの世紀も暮れる頃
長い革命の城郭が
一朝にして朽ちて
屋根も柱も
音を立てて崩れ落ちた

統一は戦争の禍根だとし
分断生活を願った地に
壁はおのずと崩れた

10月の砲声とともに
世界を包みこんだ炎は
「物質文明」の豪雨に
跡形もなく
押し流された

地球のまた一方では
連合軍の巨大なミサイルが

火の雨となって降り注ぎ
大きくもないその国は
「暴力万能」の祭壇に
またとない生贄として捧げられた

世界を震撼させた衝撃は
価値観に深刻な動揺を起こし
「物質文明」は人の世に
理念の空白を持ちこんだ

「暴力主義」をともなう
「物質文明」は今や
自らの奇形性を
人類の面前にさらけ出した

「物質文明」と「暴力万能」は
20 世紀を支配し
人類のねじまげられた価値観をもって
20 世紀に君臨した

いまなお数知れぬ人びとが
おのれがいかなる存在かも知らず
自我に目覚めることもなく
麗しいわが容姿を引き立てようともしない

人間の価値は何かと
思い思いに悩み続けた
現代の多くの哲学者が
現代の多くの思想家が
激変する世紀末の動きを見極めて
心から受け入れたその真理
あー　チュチェは生命だ

世界のいかなる風潮にもなびくことなく
ひたすら社会主義の一路を進む朝鮮が
高楼のごとく毅然とそびえ立ち
万人の驚異の視線を引きつけた

鉄桶さながらに
社会主義を守る東方の朝鮮
それは　チュチェ思想の光のもと
千万の心を一つに結んだ
偉大な金正日
将軍の勇姿

まこと人類に
偉大な思想がなかったなら
渦巻く狂風のなかで
舞い立つ風塵に目を遮られ
明日を見通すことができたろうか

世界の最高峰に
人民を立たせた
偉大な人間　金正日将軍に
歴史は世紀を託し
人類は新生の歌をうたう

栄光あれ
チュチェの軌道に乗って
新しい世紀を迎える人類の前途に
巨大な歴史の流れに

話しても話しても
尽きることのない話が
わが胸に積もりに積もり
歌っても歌っても湧き出ずる
わが歌は
偉大なチュチェ思想に魅せられた
わが心の叫び

高鳴る胸の
抑えがたいこの歓声は
チュチェの真理が永遠なように
果てることがない　果てることがない

今　わたしは聞く
世界数十億の心が
地球を力強く叩く音を
チュチェの旗を高く掲げて
新しい世紀に向かう高らかな足音を

あー　チュチェの光輝く
われらのこの惑星に
永遠の幸いあれ

わたしが　きょう
驚嘆の心を一つに合わせ
つたないながら
心を込めてうたうこの歌

自主に向かう心と心に
流れよ　みなぎり流れよ